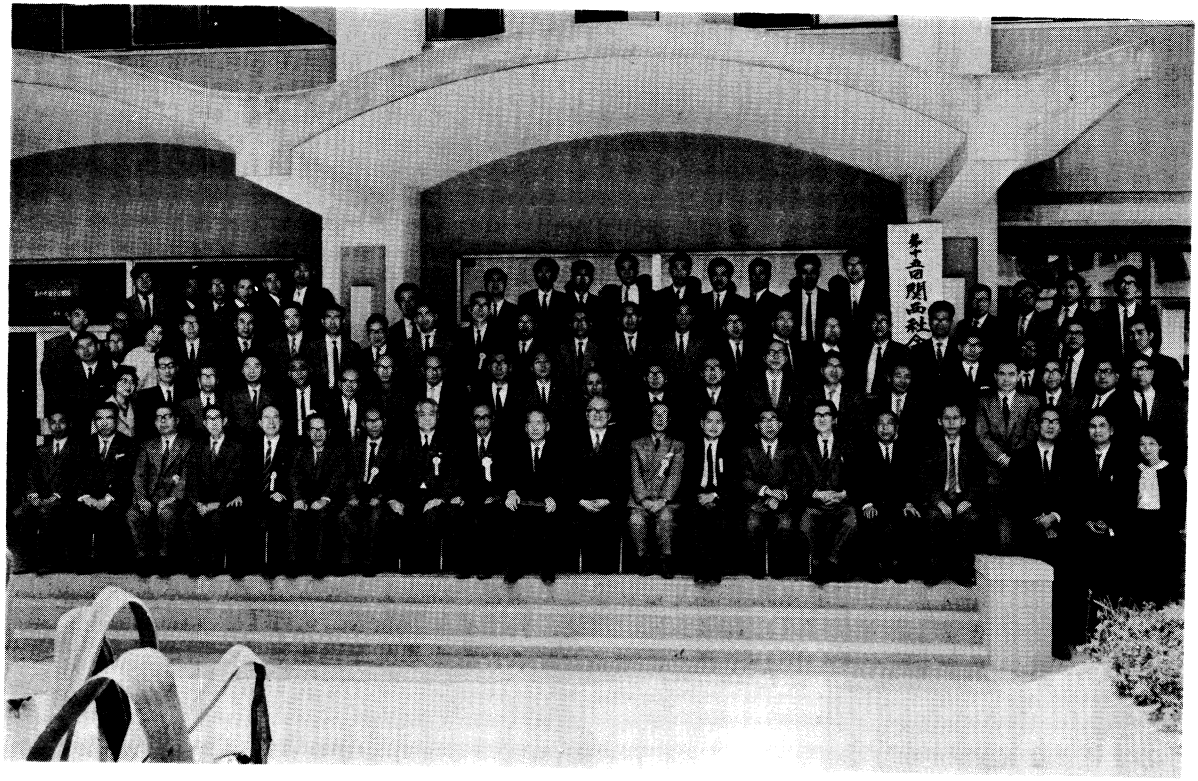
関西社会学会のあゆみ

―創立25周年を記念して―

関西社会学会編
昭和50年4月

第 6 回 大 会 (昭和30年5月28日、於金沢大学)



第１５回　大　会　(昭和39年５月16日、於名古屋大学)

クラックホーン講演会 (昭和29年8月23日、於神戸女学院大学)

目　　次

1. 記念誌刊行にあたって …… 森　好夫 (1)
2. 関西社会学会役員一覧 …… (2)
3. 学会年譜 …… (5)
4. あゆみを回顧して …… (13)
　追　想 …… 臼井二尚 (13)
　学会のなりたち …… 蔵内数太 (15)
　委員長（昭和40年～46年）として …… 井森陸平 (17)
　高田博士の逝去と選挙規則の改正など …… 森　東吾 (18)
　常任委員時代の思い出 …… 喜多野清一 (20)
　常任委員の思い出 …… 江藤則義 (20)
　常任委員の思い出 …… 池田義祐 (21)
　事務局の思い出 …… 増田光吉 (22)
　常任委員の体験 …… 甲田和衛 (22)
5. 学会大会・思い出・シンポジウムについて …… (23)
　小関藤一郎 (29)、上林良一 (32)、井森陸平 (35)、
　大道安次郎 (37)、長谷川昭彦 (40)、今崎秀一 (44)、
　川越淳二 (47)、向井利昌 (48)、甲田和衛 (48)、
　堀　喜望 (51)、山本　登 (51)、井上公正 (55)、
　小関藤一郎 (55)、林　稲苗 (58)、阪井敏郎 (59)、
　森　東吾 (61)、雀部猛列 (62)、阿閉吉男 (65)、
　富田嘉郎 (65)、岡村久雄 (68)、森　東吾 (69)、
　野久尾徳美 (71)、今崎秀一 (71)、上子武次 (74)、
　江藤則義 (75)、川崎恵璋 (77)、仲村祥一 (77)、
　今崎秀一 (80)、堀　喜望 (80)、四方寿雄 (82)、
　四方寿雄 (83)、橋本　真 (86)、池田義祐 (86)、
　高橋純平 (88)、上子武次・光吉利之 (89)、
　井森陸平 (91)、小関藤一郎 (92)、角　節郎 (95)、
　角　節郎 (95)
6. 欧米学者の講演会 …… (96)
　伊藤規矩治 (96)、伊藤規矩治 (96)、伊藤規矩治 (96)、
　橋本　真 (97)、磯部卓三 (98)、小関藤一郎 (98)、
　小関藤一郎 (99)
7. 編集あとがき …… (99)

1. 記念誌刊行にあたって

森　　好　夫

本学会創立25周年を記念して何かの事業を計画したらという提案がなされたのは、森東吾氏が学会委員長を勤めておられた時期である。それが記念誌の発行という形にほぼ固まった段階で、私が宿題として昨年5月にひきついだ。早速、実行委員に森東吾、上子武次、川越淳二、豊嶋覚城の諸氏を選び、私と事務局から船津衛氏が加わって、何回か会合を重ねて計画をねり、それが実を結んだのが、この「関西社会学会のあゆみ」である。

25年といえば、私自身も最初の数回の大会の記憶が全くうすれていて、今更のように時の速さを思わせられている。どんな組織にせよ、それを創立するには随分と困難が伴なったことであろうが、とにもかくにも歴代委員長や委員諸氏の並々ならぬ努力と、会員ひとりびとりの社会学への熱意と学会への一体感とが、学会の今日を築きあげてきたことにまちがいはない。その間、社会学界のその時々の流れや問題関心の推移に応じて、本学会も発表テーマやその内容にかなりの変遷があるようでもあり、また根本問題がくり返し論議されているようでもある。その他、会員数の増加、会則の制定、改正など、いくつかの点で本誌は「社会学の社会学」の資料にもなろうかとひそかに思っている。お読み下さる方々もそれぞれの感慨にひたられることであろう。

しかし本誌を徒らに回顧の具だけにしてはなるまい。温故而知新ということに各自が思いをはせ、この時期を機に本学会が質量共に充実、発展していくことを心から念願して、刊行の辞としたい。

終りに、本誌の成立に御協力していただいた各位に心から感謝の意を捧げたい。

2. 関西社会学会役員一覧

（敬称略、五十音順）

〈**顧　問**〉

井森陸平（昭46より）、　臼井二尚（昭40より）、　蔵内数太（昭36より）、
高田保馬（昭36より昭47まで）、　難波紋吉（昭40より）

昭25～昭31〈**代表**〉臼井二尚

〈**評議員**〉　安西文夫、池田義祐、井森陸平、岩崎卯一、蔵内数太、小関藤一郎小松堅太郎、大道安次郎、高田保馬、棚瀬襄爾、富田嘉郎、富野敬邦、中野清一、難波紋吉、姫岡　勤、本田喜代治、森　東吾

昭31〈**代表のち委員長**〉蔵内数太

〈**評議員のち委員**〉　安西文夫、池田義祐、井森陸平、岩崎卯一、臼井二尚、小関藤一郎、小松堅太郎、大道安次郎、高田保馬、棚瀬襄爾、富田嘉郎、富野敬邦、中野清一、難波紋吉、姫岡　勤、本田喜代治、森　東吾

昭32～昭34〈**委員長**〉蔵内数太

〈**常任委員**〉　井森陸平、喜多野清一　〈**委員**〉　阿閉吉男、安西文夫、伊藤規矩治、今崎秀一、岩崎卯一、臼井二尚、小関藤一郎、作田啓一、桜井庄太郎、大道安次郎、棚瀬襄爾、土屋貞蔵、富田嘉郎、富野敬邦、難波紋吉、堀　喜望森　正夫、横山亮一　〈**監査委員**〉　池田義祐、姫岡　勤

昭34～昭36〈**委員長**〉臼井二尚

〈**常任委員**〉　井森陸平、江藤則義、喜多野清一　〈**委員**〉　阿閉吉男、安西文夫伊藤規矩治、今崎秀一、岡村久雄、小関藤一郎、桜井庄太郎、大道安次郎、土

屋貞蔵、富田嘉郎、富野敬邦、豊嶋覚城、難波紋吉、細野武男、堀　喜望、森　正夫、横山亮一 〈**監査委員**〉 姫岡　勤、森　東吾

昭36～昭38〈**委員長**〉臼井二尚

〈**常任委員**〉 江藤則義、喜多野清一 〈**委員**〉 阿閉吉男、安西文夫、伊藤規矩治、今崎秀一、井森陸平、岡村久雄、川越淳二、阪井敏郎、桜井庄太郎、大道安次郎、土屋貞蔵、富田嘉郎、富野敬邦、豊嶋覚城、難波紋吉、林　稲苗、細野武男、森　正夫 〈**監査委員**〉 姫岡　勤、森　東吾

昭38～昭40〈**委員長**〉臼井二尚

〈**常任委員**〉 池田義祐、喜多野清一（昭39．3まで）、井森陸平（昭39.4から）、〈**委員**〉 阿閉吉男、安西文夫、伊藤規矩治、今崎秀一、井森陸平、岡村久雄、川越淳二、阪井敏郎、大道安次郎、富田嘉郎、富野敬邦、豊嶋覚城、仲村祥一難波紋吉、林　稲苗、細野武男、堀　喜望、森　正夫 〈**監査委員**〉 姫岡　勤森　東吾

昭40～昭42〈**委員長**〉井森陸平

〈**常任委員**〉 池田義祐、増田光吉 〈**委員**〉 阿閉吉男、安西文夫、今崎秀一、岡村久雄、川越淳二、小関三平、後藤和夫、四方寿雄、大道安次郎、土屋貞蔵富野敬邦、豊嶋覚城、仲村祥一、橋本　真、林　稲苗、細野武男、堀　喜望、森　東吾、森　正夫 〈**監査委員**〉 小関藤一郎、姫岡　勤

昭42～昭44〈**委員長**〉井森陸平

〈**常任委員**〉 池田義祐、増田光吉、森　東吾 〈**委員**〉 阿閉吉男、安西文夫、今崎秀一、岡村久雄、川越淳二、川崎恵璋、阪井敏郎、雀部猛利、四方寿雄、大道安次郎、土田英雄、土屋貞蔵、富野敬邦、豊嶋覚城、橋本　真、林　稲苗

堀　喜望、森　東吾、森　正夫 〈**監査委員**〉 小関藤一郎、姫岡　勤

昭44～昭46〈**委員長**〉井森陸平

〈**常任委員**〉 阿閉吉男、池田義祐、増田光吉、森　東吾 〈**委員**〉 青井　厚、安西文夫、今崎秀一、岡村久雄、川越淳二、川崎恵璋、後藤和夫、阪井敏郎、四方寿雄、鈴木宗憲、大道安次郎、高橋憲昭、土田英雄、豊嶋覚城、仲村祥一橋本　真、堀　喜望、森　正夫 〈**監査委員**〉 小関藤一郎、姫岡　勤

昭46～昭49〈**委員長**〉森　東吾

〈**常任委員**〉 池田義祐、川越淳二、甲田和衛、増田光吉 〈**委員**〉 青井　厚、金屋平三、川崎恵璋、小関藤一郎、阪井敏郎、塩原　勉、四方寿雄、杉之原寿一、鈴木宗憲、高島昌二、田中清助、土田英雄、土屋貞蔵、橋本　真、益田庄三、森　好夫 〈**監査委員**〉 江藤則義、重松俊明

昭49～　　〈**委員長**〉森　好夫

〈**常任委員**〉 上子武次、甲田和衛、堀　喜望、余田博通 〈**委員**〉 新　睦人、阿閉吉男、池田　昭、真田　是、杉之原寿一、角　節郎、高島昌二、高橋純平豊嶋覚城、中　久郎、二宮哲雄、野崎治男、牧野由朗、益田庄三、松本通晴、光川晴之、八木佐市 〈**監査委員**〉 作田啓一、土屋貞蔵

3. 学 会 年 譜

(大会)	(開催年)	(開 催 校)	(参加者数)	(発表者数)
第1回	(昭25)	京都大学	76	2
第2回	(昭26)	同志社大学	92	25
第3回	(昭27)	徳島大学	55	35
第4回	(昭28)	南山大学	50	39
第5回	(昭29)	関西大学	128	52
第6回	(昭30)	金沢大学	95	31
第7回	(昭31)	関西学院大学	110	30
第8回	(昭32)	三重大学	118	42
第9回	(昭33)	和歌山大学	118	51
第10回	(昭34)	愛知大学	108	62
第11回	(昭35)	神戸大学	142	46
第12回	(昭36)	奈良女子大学	126	50
第13回	(昭37)	愛知学芸大学	120	40
第14回	(昭38)	大阪大学	125	37
第15回	(昭39)	名古屋大学	173	33
第16回	(昭40)	大阪府立大学	169	44
第17回	(昭41)	立命館大学	155	29
第18回	(昭42)	大阪市立大学	195	33
第19回	(昭43)	竜谷大学	236	28
第20回	(昭44)	桃山学院大学	157	25
第21回	(昭45)	愛知県立大学	158	23
第22回	(昭46)	関西大学	223	36
第23回	(昭47)	金城学院大学	238	25
第24回	(昭48)	甲南大学	276	41
第25回	(昭49)	香川大学	171	39

〈主なできごと〉

昭25　第1回関西社会学会大会開かれる（昭25．6．11）。於京都大学。参加者76名。研究報告2、講演2。学会代表として臼井二尚氏推される。

昭28　ミヤガワ（T. S. Miyagawa）講演会（於同志社大学）

昭29　大会参加者100名をこえる(第5回大会、於関西大学)。

クラックホーン（C. Kluckhohn）講演会（昭29．8．23、於神戸女学院大学)。

昭30　リンドストローム（D. E. Lindstrom）講演会（於関西大学)。

昭31　学会代表、蔵内数太氏となる。(臼井二尚氏、日本社会学会会長就任)。事務局阪大・会員数297名。学会会則制定、施行される（昭31．5．26)。それは次の通りである。

第1条　本会は関西社会学会と称する。

第2条　本会は関西地区における社会学の発達を推進し、かつ会員相互の研究上の連絡を図ることを目的とする。

第3条　本会は前条の目的を達成するために左の事業を行う。

1．年次大会の開催

2．研究会、講演会等の開催

3．その他必要なる事業

第4条　本会は原則として関西地区に在住する社会学の専門研究者および社会学に関心を有する者をもって会員とする。

第5条　本会に入会しようとする者は、会員2名の紹介を要し、委員会の承認を受けるものとする。

第6条　本会に左の役員を置く。

委員長	1名
委員および常任委員	若干名
監査委員	2名

第7条　役員の任務は左のとおりとする。

1．委員長は会務を主宰し本会を代表する

1．委員は会の運営に当る

1. 常任委員は本会の事務を処理する

1. 監査委員は会計を監査する

第8条　委員および監査委員は総会において選任し、その任期は2ケ年とする。委員長および常任委員は委員会において互選する。

委員会は委員長の申出ある場合、さらに委員1名を選任することができる。

第9条　総会は年1回年次大会の際に開催する。但し必要ある場合は臨時総会を開くことができる。

第10条　本会の経費は会費・寄附金等をもってこれにあてる。会費は年額200円とする。

第11条　会員の義務を怠る者は委員会の議を経て除名することができる。

附　　則

第12条　本会則において関西地区とは近畿ならびにその周辺とする。

第13条　昭和25年以降において本会会員名簿に登録されている者は本会則による会員とする。

第14条　本会の事務所は委員長の所属する研究機関内に置く。

第15条　本会の会計年度は毎年4月1日より翌年3月31日までとする。

第16条　本会則の変更は総会の議を経なければならない。

第17条　本会則は昭和31年5月26日より施行する。

昭32　コーソン（J. H. Korson）講演会（昭32.6.8、於関西学院大学）。学会役員選挙規則きまる（昭32.10.26）。それは次の通りである。

1. 役員の選挙は総会出席の会員の直接選挙により総会において行う。
2. 委員の定員を20名とし、監査委員は2名とする。
3. 選挙は全地域を次の6地区に分け、その定員は左記の通りとする。

A　地区（富山・石川・福井）　1　名

B　地区（徳島・高知）　1　名

C　地区（岐阜・愛知・三重）　4　名

D　地区（滋賀・京都）　5　名

E　地区（大阪・奈良・和歌山）　6　名

F　地区（鳥取・兵庫）　3　名

但し、岡山・広島の会員は、選挙権を有するが、被選挙権を有しない。

4. 投票は連記とする。

5. 監査委員2名は右の地区に拘りなく全地区より同時に選出する。

6. 委員は一研究機関1名とする。

7. 委員と監査委員に同一人が選ばれた場合は、委員として之を認め、監査委員には次点者を繰上げる。

8. 役員は連続選任を妨げない。

9. 総会座長は選挙管理委員5名を指名し、選挙管理委員は委員長を互選する。

10. 被選挙人名簿は、会員名簿をもって之に当て、総会以前に配布し異動があった場合には総会の前までに訂正の申入れを求めることとする。

11. その他は日本社会学会の選挙方法に準ずる。

新役員選出される（昭32．10．26）。委員長、蔵内数太氏。常任委員2名、委員18名、監査委員2名。会員数300名。

昭33　ハイマン（E. Heimann）講演会（昭33．6、於 同志社大学）。

昭34　委員長、臼井二尚氏選出される（昭34．5．29）。事務局・京都大学。

シンポジウムはじまる（第10回大会、昭34．5．29～30、於愛知大学。テーマ「コンミュニティ」「社会事象の計量化」について）。

昭35　ヘルファールト（H. Herrfahrdt）講演会（昭35．1．15、於 京都大学）。

レヴィ（M. Levy）講演会（昭35．7．28、於京都アメリカンセンター）。

昭36　委員長に臼井二尚氏再選される（昭36．5．27）。顧問制度できる。高田保馬、蔵内数太氏推薦される（昭36．5．27）。

昭38　委員長に臼井二尚氏三選される（昭38．5．25）。会員数320名。

昭39　学会会則改正される（昭39．5．16）。

第14条を、「本会の事務所の設置箇所は、委員会の議を経て、委員長がこれを定める」に改める。

役員選挙規則改正される（昭39．5．16）。 改正の要点は、 (1)選挙権、被選挙権の資格は会費の納入者とする。 (2)選挙管理委員はあらかじめ委嘱する。 (3)委員の地区別割当数は、地区ごとの会員実数に比例するようにする。(4)監査委員が一研究機関につき1名をこえないようにする。

大会参加者170名をこえる（第15回大会、昭39．5．16～17、於 名古屋大学）。会員数323名。

昭40 委員長に井森陸平氏選出される（昭40．5．22）。 事務局・甲南大学。会員数325名。

臼井二尚氏、難波紋吉氏顧問に推薦される（昭40．5．22）。

昭41 会員数337名（昭41．5）。

昭42 委員長に井森陸平氏再選される（昭42．5．20）。会員数345名。

大会参加者ほぼ200名（第18回大会、昭42.5.20～21、於 大阪市立大学）。

マートン（R. K. Merton）講演会（昭42．8．1、於同志社大学）。

昭43 会員数366名（昭43．5）。

昭44 委員長に井森陸平氏三選される（昭44．5．24）。会員数369名。

昭45 学会会則改正される（昭45．5．23）。 改正点は、 (1)委員の任期を3ケ年に（従来2ケ年）。 (2)会費を年額600円に（従来400円）。

役員選挙規則改正される（昭45．5．23）。改正点は、 (1)投票時間を大会第1日の午前11時より午後2時、投票場所を大会会場とする。(2)選挙人名簿を作成する。(3)役員の三選を禁止する。会員数378名。

ソーヴィ（A. Sauvy）講演会（昭45．11．12．於 科学技術センター）。

昭46 委員長に森東吾氏選出される（昭46．6．5）。 事務局・大阪大学。会員数は、整理されることによって、318名。

井森陸平氏顧問に推薦される（昭46．6）。

フリードマン（G. Friedmann）講演会（昭46．11．15、於モーツアルト・サロン）。

昭48 役員選挙規則改正される（昭48．5．19）。改正点は、 (1)被選挙権を指

定地区以外にも拡大する。(2)委員定数を22名（従来21名）とし、全地域を7地区（従来6地区）に分け、再編成する。

昭49　委員長に森好夫氏選出される（昭49．5．24)。事務局・大阪市立大学。会員数388名。

関西社会学会会則

昭和39年5月16日改正
昭和45年5月23日改正
昭和46年4月1日施行

第1条　本会は関西社会学会と称する。

第2条　本会は関西地区における社会学の発達を推進し、かつ会員相互の研究上の連絡を図ることを目的とする。

第3条　本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

1．年次大会の開催

2．研究会、講演会等の開催

3．その他必要なる事業

第4条　本会は原則として関西地区に在住する社会学の専門研究者および社会学に関心を有する者をもって会員とする。

第5条　本会に入会しようとする者は、会員2名の紹介を要し、委員会の承認を受けるものとする。

第6条　本会に次の役員を置く。

委員長	1名
委員及び常任委員	若干名
監査委員	2名

第7条　役員の任務は次のとおりとする。

1．委員長は会務を主宰し本会を代表する

1．委員は会の運営に当る

1．常任委員は本会の事務を処理する

1．監査委員は会計を監査する

第8条　委員および監査委員は総会において選任し、その任期は3ケ年とする。

委員長および常任委員は委員会において互選する。

委員会は委員長の申出ある場合、さらに委員1名を選任することができる。

第9条　本会に顧問を置くことができる。顧問は委員会の推薦による。

第10条　総会は年1回年次大会の際に開催する。但し必要ある場合は臨時総会を開くことができる。

第11条　本会の経費は会費、寄附金等をもってこれにあてる。会費は年額600円とする。

第12条　会員の義務を怠る者は委員会の議を経て除名することができる。

附　　則

第13条　本会則において関西地区とは近畿ならびにその周辺とする。

第14条　昭和25年以降において本会会員名簿に登録されているものは本会則による会員とする。

第15条　本会の事務局の設置箇所は、委員会の議を経て、委員長がこれを定める。

第16条　本会の会計年度は毎年4月1日より翌年3月31日までとする。

第17条　本会則の変更は総会の議を経なければならない。

第18条　本会則は昭和31年5月26日より施行する。

関西社会学会役員選挙規則

昭和48年5月19日改正
昭和49年4月1日施行

1. 役員の選挙は、大会第1日の午前11時より午後2時までの間に大会会場において、選挙権を有する会員の直接選挙によりこれを行う。
2. 会員にして、選挙の行われる年の3月末日までに、その前年度を含み2回以上会費を納付した者は、選挙権並びに被選挙権を有する。
3. 選挙は選挙管理委員の管理のもとに行う。選挙管理委員は5名とし、選挙の行われる年の最初の委員会の議を経て、委員長がこれを委嘱する。
4. 選挙管理委員会は、選挙人及び被選挙人名簿を作成し、大会第1日の2週

間前までに会員に通知し、その確認を求めるとともに異議の申し立てを受けつける。

5. 投票は連記無記名とする。

6. 3期連続して役員となることはできない。

7. 役員の定数は次の通りとする。

1. 総会において選出される委員の定数は22名とし、全地域を次の7地区に分け、会員数15名以下の地区は1名とし、会員数15名以上の地区については、15名以下の地区の委員数を控除した残余の総数を各地区の会員数に応じて按分する。

A 地 区	(岐阜県・三重県・愛知県以東)
B 〃	(富山県・石川県・福井県)
C 〃	(滋賀県・京都府)
D 〃	(奈良県・和歌山県・大阪府)
E 〃	(兵庫県)
F 〃	(香川県・徳島県・高知県・愛媛県)
G 〃	(鳥取県・岡山県・広島県以西)

2. 監査委員の定数は2名とし、1の地区にかかわりなく全地区より委員と同時に選出する。

3. 委員及び監査委員は、それぞれ一研究機関につき1名をこえることはできない。ただし、関西社会学会会則第8条第2項に定める委員は別とする。委員と監査委員に同一人が選出された場合は、委員としてこれを認め、監査委員には次点者を繰り上げる。その他は日本社会学会の選挙方法に準ずる。

※ 上記、役員選挙規則改訂にともなう経過措置

昭和32年(選挙制度の実施年)以来、通算して6期あるいは7期在任中の役員は、重任中(2選目)とみなし、昭和46年度の選挙においては、被選挙権なきものとする。

その他の現役員は、すべて1選目とみなす。

4. あゆみを回顧して

追　　想

臼井二尚

関西社会学会の第1回大会は戦後に開催されたが、関西社会学会は戦前に設立されており、研究会も度々開かれたが、当時私は若輩であったため、この学会の設立には関与せず、従ってその前後の事情については知るところがないのみならず、当時の諸先輩は既におおかた故人になられて、その頃のいきさつについて正確に記憶しておられる人が見出されないのは残念の至りである。昭和9年に日本社会学会の大会が関西で初めて開かれ、これを機縁として、翌昭和10年に関西支部の設立が慫慂された。当時関西在住の社会学者としては、大阪商科大学に関栄吉、関西大学に岩崎卯一、同志社大学に難波紋吉、神戸商科大学に佐野一彦、関西学院大学に小松堅太郎の諸氏がおられ、広島文理大学・大谷大学・龍谷大学・高野山大学などにも社会学の講義があったが、その時間数は僅かであり、大阪大学は自然科学の分野に限られた儘であったので、関西社会学会の設立に主として尽力されたのは、この種の仕事に対する積極性に富んでいた関氏あたりであろうと推測される。当時は名古屋・高岡・岐阜・岡山・鳥取などは関西の圏外にあったので、関西社会学会の初めての会員は上記の諸氏のほかは、おおかた京阪神の法・経・商の領域の人々であった。従って研究会に出席する人々も大部分はこれら隣接諸領域の人々であり、この事は報告担当者も主としてこれらの領域の人々であった事からもうかがわれる。例えば、最初に近い神戸商大での研究会における発表者は、大阪市役所の社会部長山口正氏と大阪商大の藤田敬三氏の2人であり、山口氏は当時の世界大不況から生じた失業問題とその対策としての職業紹介事業について述べ、藤田氏も社会政策方面の問題を論述されたと記憶する。

間もなく支那事変が勃発し、日本は戦争に向かって急進し始めたので、関西社会学会の活動は衰退せざるを得ず、京都大学の楽友会館の一室に約10名の会員が集まって、末川博氏が「契約というもの」なる題下に論述されるのを聴い

たのを最後として、戦前の関西社会学会は終熄するにいたった。

その頃から社会学者は学問の性質上しばしば戦争への協力を求められ、これに応じて戦争を肯定し日本主義を唱えなければ、非国民呼ばわりをされ、さりとて心にもない戦争礼讃は出来ず、ここに社会学者の苦難の時期が始まった。終戦を迎えると間もなく適格審査なる事が始まり、関西の社会学者にも追放の厄に遭った人が少なくなかった。関西地区でこの審査を担当した進駐軍の人物はテクスターなる軍属であった。後年私は米国でこのテクスターと逢った時、彼の関西における行き過ぎを難じたところ、彼はあの地位に他の者がついていたら、もっと荒いことをしたであろうと弁解するという一幕があった。

戦後当分混乱が続き、大学の講義や研究も妨げられがちであったが、関西社会学の再建について頗る熱心であった小松堅太郎氏に督促されて、私は大会開催の準備に当たり、その第1回を京都大学で開くことになったが、その時は一般会員の研究発表は行なわず、午前・午後とも2人ずつの会員の講演を全会員が聴くという形をとった。私が前座をつとめ、次に小松氏が民族論を展開した。恒藤氏は「平和問題の科学的考察」という題のもとに、主として高田先生の国家論に対して批判を加えた。氏独特の低声で、冷静明晰に高田先生の説に仮借なき論難を加えたのは、極めて強い印象を与えた。併し最後に壇を立たれた高田先生は、この恒藤氏の批判に答えることはされず、かねて用意して来られた階級と封建制に関する説述をされて、会は終わった。

第2回大会からは、現在と同様に一般会員の報告を専らにし、第2回には2室25名、第3回には3室35名というふうに、漸次報告者の数も従ってまた参加者の数も増加の一路を辿り、会は膨張充実を続けて今日に到った。この発展は、戦後日本における社会学の認識評価が改まり、各大学に社会学の講義が設けられ、それが更に拡充されて、やがて社会学科から遂には社会学部すら諸大学に設けられるとともに、社会学の専攻者がいずれも然るべき就職先を見出すという社会学興隆期が到来したという変動に対応したものである。

戦後日本の社会科学界の新しい動向の一つとして実態調査の発達が挙げられるが、関西社会学会においても、この方面の報告が年々増加し、それにつれて、研究が現代の日本に集中するとともに、他方、病理・福祉・情報など応用

社会学的部門の報告も多くなって、理論や歴史の部門が劣勢の観を呈するようになったのは自然の成り行きであった。戦後間もない頃には地方における文化活動が乏しく、また新興社会学の認識を広める事の必要も感ぜられたので、大会開催地及びその近くの都市で、しばしば公開講演会を開催したが、近年はこの事はみられなくなった。また以前には、関西以外の地区からの報告者の参加もあったが、これも近年は殆ど無くなった。更に私はかつてのドイツ社会学会や現在の日本医学会の例にならい、大会に1人または2人の2時間程度の特別講演を全員が聴く試みを始めたが、これも3回続いたのみで廃止となり、すべてが日本社会学会の大会と同一形式になったのは遺憾に思っている。物故された先輩諸氏また関西地区を去られた諸会員についても想い出は多いが、ここには割愛せざるを得ない。

ともかくも、戦後の日本における人文社会関係の学界において、社会学の如くめざましい興隆を遂げた科学は他に見出し難い。この趨勢が衰える事なく、これとともに関西社会学会もこれまでの輝かしい歩みを続けて、益々健実に発展せん事を、衷心から祈念しつつこの筆を擱く。

1974年9月28日　　韓国慶尚南道の農村にて。

学会のなりたち

蔵内数太

関西社会学会の創立について、私が最初に話を受けたのは京都大学の臼井教授からであった。昭和25年の春のことである。私は昭和23年11月下旬に大阪大学に着任したのであるが、その1、2年前、福岡で西部社会学会（今日の西日本社会学会）の創立に関係した経験から、関西にもぜひ同じような地域的学会があるべきであると思っていたので、即座に賛成した。やがて高田保馬先生、岩崎卯一、小松堅太郎、難波紋吉などの諸氏の協議を経て、関西社会学会の名の下に最初の大会を開催する運びになったのであったと記憶する。戦後間もない頃の日本社会学会の会議で、私は今後社会学者は急に増加するであろうし、学界を活発にするには、地域的学会や、個別領域の学会が整備されて来るべき

で、全国学会はやがてはそれらの連合体として再編されるのがのぞましいのではないかと発言したことがあり、わけても比較的多くの社会学者のいる関西の社会学会設立の意義は大きいと考えていた。

しかし当初は学会といっても、会としての実体よりは1年に1回地区内の社会学者の研究発表会を催すということだけに主眼があった。したがって会則というほどのものはなかったように思う。会則や、役員選任方法などがはっきり定められたのは、昭和31年5月の大会からである。この点では右にふれた西部社会学会のばあいと少しちがっていた。

最初の関西社会学会大会は昭和25年6月11日京都大学で開かれた。この大会は2部に分かれ、午前を研究報告会に当て、臼井、小松両氏が発表し、午後を講演会に当て恒藤恭、高田保馬の両先生を煩わした。別に掲載せられているとは思うが、臼井氏は日本の風土に関し、小松氏は民族と階級に関して論じた。もっともこれらの題目は準備の相談会に出席した人達の間から出た要請によってきまったものである。次に講演の題目の方は恒藤氏の「平和問題の科学的考察について」と、高田氏の「社会段階説の考察」であった。恒藤氏が右の講演の中で高田学説に対し綿密な論陣を張られたことが印象に残っているが、その内容についての私の記憶が不確かなのがいま残念である。

われわれの学会の初期に関しては、いずれ当時の学会代表であった臼井氏が記述していると思う。ただ私としてはこの間の大会開催などに力を尽されて、いまはこの世にない同学の先輩友人が感慨深く想いだされる。高田、恒藤、小松氏のほか、竹中勝男、秋葉隆、岩崎卯一、上西半三郎、桜井庄太郎、富野敬邦、中島龍太郎、森正夫氏などがそれである。第6回の金沢大学での大会では故戸田貞三先生の令兄の衛生学者戸田正三学長に格別のお世話になり、その酒豪ぶりにも接したのであるが、氏もつとに故人となっていられる。

私が委員会の責任者を引受けていたのは昭和31年より同34年まで、すなわち第7回の関西学院大会、第8回の三重大学大会、第9回の和歌山大学大会、第10回の愛知大学大会の期間である。この間の大会における発表の内容や動向について回顧しようと思って逐年のプログラムを見たものの、私が直接聴くことができたのは固より一部に限られており、題目だけによって動向を概括するの

も皮相的に過ぎることになろう。ただ今更に感ぜられることは——関西社会学会に限らないことではあるが——発表がされっぱなしでなく、各部門別の成果がコンパクトな形にまとめられて、順次引きついで来られたらよかったということである。

しかしそれはともかく、右の期間で目につくことの一つは共同研究の発表が現われて来たこと、いま一つは昭和31年関西学院大学大会でパーソンズの名がプログラムに現われ（小関藤一郎氏）て以来、その理論の解説、評論が踵を接して来たことである。このほか、学会の仕事として時には外国の学者の講演会も主催されており、昭和29年8月には難波氏が院長であった神戸女学院でクラックホーン氏の、同30年4月には関西大学で農村社会学者リンドストロム氏の講演があったが、右の31年以後の期間では、32年6月関西学院大学でJ・H・コーソン教授の「米国学生の社会移動について」の講演があった。

紙幅がないので最後に一つだけ記すと、昭和33年11月日本社会学会の本部から当時物議を呼んでいた「警察官職務執行法一部改正法律案」に関して、政府は世論の批判を受け容れよとの学会の声明の案文が送られて来て、関西社会学会が同意するかどうかが問われたことがある。早速委員会を開いて協議したが、結局、学会は会員が社会学の研究者であるという一点だけで結びついているので、このような問題について、委員会の意見で会員の総意を代表しがたいということになり、この旨を常任委員の名で本部に回答した。その後、この問題は政府与党で審議未了にすることに決定したので、声明のことは見送るという通知が重ねて送られて来て、問題は一応終った。しかしこれとは別に現実問題に関し一般に社会学者が権威ある発言をなしうるのはどういうばあいなのか、或は社会学のありかたそのものの問題はつねに残っている。

以上は私が会務に当っていた期間の想い出の若干である。

委員長（昭和40年～46年）として

井　森　陸　平

性来不肖不敏の身をもって、図らずも臼井、蔵内両先生の後を嗣ぎ、その上

心ならずも長く職を汚すことになり、汗顔の至りにて、皆様の御寛恕を請う次第であります。在任中、大会開催校の引き受け、研究発表等並々ならぬ御支援、御協力を通じて、学会の運営をお助け下さった皆様方の暖かい思し召しは殊の外嬉しく、衷心感謝します。大方無為に過ごしたなかで、心に残る一、二を記してみます。一つは、大会開催の当番校は、色々気苦労が多く、迷惑をおかけすることが多いので、せめて経済的負担は余りかけないようにとの趣旨から、適当でない慣行を改めたり、新しく補助金交付規定を設けました。今一つは、役員の新陳代謝を計るため、従来の無制限な連続就任に或る程度の制限を加えるよう、選挙規則を改正しました。これにはよくない点もあろうが、老若を問わず、沢山の会員が交代に役員になることは、学会に対する関心や責任感を強めるという点で、利点が多いのではないかと思います。

高田博士の逝去と選挙規則の改正など

森　　東　吾

会則の変更で私の時から委員長の任期が3年になり、第22回大会直後の新委員会で私が選出された旨、増田さんから報告をうけたときはまったく意想外であった。当時、阪大での同僚、甲田教授は外遊中なので、手紙で委員長指名の常任委員を依頼、その内諾を得、また事務局を阪大で担当する態勢もできたので、委員長就任を受諾した。

私の任期中の最大の事件は高田保馬博士の御逝去（昭和47年2月2日）である。前年の12月27日に米寿の祝いを済まされてから間もなくのことであった。先生には本学会発祥の時の研究集会にも講演をお願いしており、学会草創期で会則起草の打合せ会にも先生は進んで出席され、1905年創立のドイツ社会学会が会員の資格を業績を主として厳重に制限した故事を引用され、徒らに形式的な会員適格の志望者を広く募り、その選挙によって役員を決定する弊害を指摘し、学会のありかたを諄々として説かれたことは、会則起草の任に当っていた一人として、私などの感銘深い思い出である。氷雨降る御葬儀にはその学恩を慕って会葬者は全国からひきも切らず、不肖、本学会を代表して弔辞を捧げた

が、その直後の第23回大会ではとくに臼井顧問を煩わして追悼講演をお願いした。

任期中の特別な仕事には役員選挙規則の改正がある。本学会は従来、西日本社会学会と地盤の協定をしており、中国地方は鳥取県、四国地方は徳島、高知両県をその範囲としたが、その後、会員は中国、四国全域に及び、九州方面にも散在するに至り、またかつて本学会の有力な会員で東京方面に転任する人も増えてきた。これらの人々は会員としての義務を果していながら、旧規則では被選挙権を認められていなかった。それは、この人々が役員に選ばれても、御本人も迷惑であろうし、運営上、当初はいろいろの支障が予想されたからであった。しかし会員としての権利を十分に行使できない形式的な不合理があったので、それを是正するため、第24回大会において役員選挙規則第2条の但し書を削除、本学会の範囲を東は愛知県以東、西は広島県以西、四国は全域とすることに改めた。このため、この地域在住の会員は関東社会学会或いは西日本社会学会に同時に所属し、同時に役員に選出されても、これを受諾することは本人の自由意思に任せることとなった。この規則の改正は、ことに西日本社会学会の歴代委員長の山岡栄市氏や近沢敬一氏と私、常務委員の池田、増田、甲田氏らが数回会談を重ね、諒解に達したものである。

かくて新しい規則に基づき、第25回大会は昭和27年の徳島大学以来、22年ぶりに四国に進出、香川大学で開催され、役員改選の結果、新地区からも役員が選出されることになった。

私の阪大在任は昭和48年3月までなので任期半ばに辞任を申出たが、退官後勤める大学が生憎と阪大と同じ地区にあるため、この申出は却下され、任期一杯勤めざるをえないことになったが、阪大事務局で実務に当っていた甲田さんや、山本剛郎、井上純一、高坂健二、平松闊諸君には委員長不在で何かと不便があったことと思われる。幸いにして甲田さんの緻密な采配とこれら諸君の献身的な努力で私は任期を全うすることができたが、これは今後、委員長選出に当って考えなければならない問題であろう。

第25回大会には本学会の沿革を示す年譜を作成して配付する予定であったが、このための予算も計上しておらず、もう少し充実した内容の沿革史をとい

う希望も強く起り、この仕事を次期委員長の森好夫氏に申し送ることになったのは、私の不手際で申訳のない次第である。ここに深くお詫びしなければならない。また私の任期中、大会開催校を引きうけて下さった金城学院大学、甲南大学、香川大学の関係者諸氏にも心から感謝しなければならない。

常任委員時代の思い出

喜多野　清　一

私は大阪大学に昭和31年4月から39年3月まで在任しましたが、関西社会学会の常任委員であったのはその後半期だったと思います。それまで九州大学にいて西部社会学会に関係していましたから、関西社会学会はちょうどよい大きさで、殊に学会組織としてよく整っていることを強く感じました。私はできるだけこの組織を尊重し、各地区の活動の活発化と、会員の研究の自由な創造性の伸長を願う気持で学会に臨んでいたように思いますが、事実は何も積極的な貢献はできなかったようです。学会の政治声明問題で私は反対の立場をとったのが反感を買いましたが、常任委員としてやむをえなかったと思っています。苦しい思い出はこれくらいで、あとは愉快に過ごすことができ、親しい友人もできまして、去り難い気持があるものですから、今も会員に残していただいているわけです。執筆の機会まで与えていただいて感謝いたします。

常任委員の思い出

江　藤　則　義

私は、昭和34年7月から37年5月の第13回大会がおわるまで、4年間阪大の喜多野教授とともに、臼井委員長のもとで常任委員をしていた。この期間中私の思い出になっていることが二つある。その一つは、第11回大会が神戸大学で開催されるまでの過程、その二つは、第12回の奈良女子大学での大会についてである。第11回大会は、最初開催が予定されていた高野山大学の事情（上西教授の逝去）によって、大阪市立大学にうつり、これが、また大学の事情によっ

て奈良女子大学と天理大学の共催へ、それがまただめになり、最後に、神戸大学におちついた。これは二大学の協力関係が得られなかったためで、京都大学の文学部の会議室で委員会を開催中に天理からの辞退の電話に接した。おどろいて、その理由をただすため喜多野教授とともに天理をおとづれたが、結局は断念せざるをえなかった。そこで神戸大学の堀教授にお願いして、心よく引きうけていただき、ほっとしたことを思いおこす。第12回大会は、臼井委員長外遊のため、私がほとんど事務を処理し、喜多野教授を委員長代行として、無事、大会を終了することができた。

この間、事務は有能な高島助手がおられたので全部おまかせし、ただアレンヂさえすればよかった。同氏の協力がなかったならば、その任を全うすることはできなかったであろう。この機会に厚くお礼申しあげたい。

常任委員の思い出

池田義祐

関西社会学会がまだ草創の時代で、蔵内先生が二代目の学会代表であられた昭和30年頃、大道安次郎、森東吾両教授と共に幹事（委員）となり、学会会則の草案などを作成したが、この幹事が常任委員の前身であったように思う。会則が全くなかったところから、まがりなりにも会則が誕生したわけで、それなりに両先輩の驥尾に附して苦心したことを覚えている。幹事としての期間は2ケ年間であった。

昭和38年5月から昭和49年5月まで、連続して11年間、常任委員の席を汚してきたが、井森委員長の下での6年間が最も長く、また印象が深い。昭和40年から昭和45年であり、大学紛争やベトナム問題などにより、学会も常に緊迫した状況のなかにおかれていた。ベトナム問題で学会の声明をめぐって緊張した昭和40年の第16回大会や、大学紛争の最も激しかった昭和44年の第20回大会（この年の秋、日本社会学会は島根大学で第42回大会が開かれ、たまたま日本社会学会の常務理事でもあったので、春の関西社会学会での常任委員としての経験が私自身の心の支えになっていた。）の折の切迫した雰囲気は、終生忘れ

ることができない。嵐の中での学会が、将来をも含めた関西社会学会の長い歴史のなかで、どのように位置づけられ、どのような意味付けをなされるであろうか、筆をおくにあたって私は感慨を禁じ得ない。

事務局の思い出

増田光吉

学会の事務局というものは、大きな大学がひきうけるものと思いこんでいた私にとって、京都大学から甲南大学へ事務局が移り、しかも私がお世話をしなければならぬことになろうとは、まさに晴天のへきれきともいうべき出来事でした。それがなんと6年間も続き、なんとか形をととのえることができたのは多くの方々のお力ぞえの結果です。まず、文字どおり学会の運営に無知な私にとって、古くからの経験をお持ちの委員諸氏のご親切なアドバイスの数々を忘れることはできません。つぎに、事務局にとって大会の開催、なかでも開催校の依頼は大変な仕事ですが、私の在任中、6つの大学で心よくおひきうけ戴いたご厚情を今でも有難く思っています。内輪のことになって恐縮ですが、社会学研究室に入野須美さんという有能なセクレタリーのおられたことも見逃すことはできません。根本的には井森委員長のご人徳のおかげと信じています。

さて、時あたかも大学紛争のさなかにあたり、学会もいくつかの改革がおこなわれました。名目だけの会員の整理、規約の改正、とりわけ選挙法の改正をおこなって、より多くの方々に責任をもっていただくようになったのもそのあらわれです。当時の委員の方々のご努力をあらためて思い出しております。

常任委員の体験

甲田和衛

与えられたテーマは〝常任委員時代の思い出〟である。〝思い出〟というには、まだ新しく、〝体験〟とさせていただいた。学会の事務は、(1)会費の徴集、(2)大会開催の準備、(3)名簿の整備、役員の選出が主なものである。この事務量は考えるよりも大きい。日本社会学会が役員任期を3年に改訂して、本

学会もこれに倣ったが、任期3年は長く、役員数も多過ぎるように思われる。学会は研究交流の場であるから、なによりもシンポジウム、テーマ部会の企画立案などが形式的に流れることのないような努力が先行すべきはずであるが、本学会には機関誌はもとより、学会ニュースの発行もないことは御承知のとおりである。常任委員3年の間、つねにではないが、時々学会事務に疲れ果てて、〝何のために〟という深い虚しさに襲われた。学会こそ研究関心を同じくする典型的な自発的集団であるというのに。

5. 学会大会・思い出・シンポジウムについて

第1回大会

時　昭和25年6月11日（日）
於　京都大学

研究報告

日本の風土と社会　京都大学　臼井　二尚

民族と階級　元同志社大学　小松　堅太郎

講演

平和問題の科学的考察に就いて　大阪商科大学学長　恒藤　恭

社会段階説の考察—特に封建制に関して　京都大学名誉教授　高田　保馬

第2回大会

時　昭和26年6月24日（日）
於　同志社大学

《午前の部》

第1室　司会　小山　隆・大道　安次郎

1. 山村の同族及び婚姻の変動の一様式　近畿大学　川崎　恵璋
2. 一小島社会の研究　広島大学　八木　佐市

3. 社会生活における自然と伝統
(岡崎市郊外藤川村の調査報告)　岡崎高師　横山　亮一
東海中学　小島　十士夫

4. 愛知県瀬戸市地方に於ける
窯業工場に関する社会学的調査　名古屋工業大学　富田　嘉郎

5. 通婚圏の調査について　大谷大学　池田　義祐

第2室　司会　江藤　則義・姫岡　勤

1. 文化の意味　姫路工業大学　長谷川　寅雄
2. 社会理想と社会的現実　南山大学　野一色　利衛
3. マッキーヴァの社会理論に対する一考察　神戸大学　向井　利昌
4. コンミュニティ概念について　神戸商科大学　中村　正文
5. 生活の部分理解と全体理解　桝田　登

《午後の部》

第1室　司会　難波　紋吉・中野　清一

1. 丹後機業に於ける親機・子機に就て　和歌山大学　西田　春彦
2. 丁稚制度に基づく
呉服商家の「家」の構造に就て　大阪市立大学　大橋　薫
3. Social Stratification をめぐる諸問題　大阪市立大学　山本　登
4. 村落の封鎖性　京都大学　臼井　二尚
5. 妙好人研究—宗教社会学からの一試論　竜谷大学　鈴木　宗憲
6. 宗教の社会学的意義　花園大学　稲岡　順雄
7. 仏教に於ける社会史観　竜谷大学　大友　抱璞

第2室　司会　安西　文夫・樺　俊雄

1. 教育社会学の問題　同志社大学　伊藤　規矩治
2. 原始経済制度　大阪女子大学　阪井　敏郎
3. 社会的に見た都市人口問題　広島大学　青盛　和雄
4. ルソーの社会発展段階説　京大人文研　杉之原　寿一
5. ゲゼルシャフト民主社会　岐阜大学　松野　達雄
6. 未開社会における階級の成立に就て　竜谷大学　棚瀬　襄爾
7. 綜合社会学について　小松　堅太郎
8. 都市社会学の成立　東京都民生局　磯村　英一

第3回大会

時　昭和27年6月28日（土）
於　徳島大学

《午前の部》

第1室　　司会　富野　敬邦・清水　盛光

1. 法律社会学考　　岐阜薬科大学　澤　登　定教
2. 技術と社会　　姫路工業大学　長谷川　寅雄
3. 社会問題の社会学的概念について　　南山大学　山根　常男
4. コンミュニテー概念の整理　　大阪学芸大学　横山　亮一
5. ソーシャル・ディスオーガニゼーションの概念について
   大阪市立大学　大橋　薫
6. 社会変動と道徳の諸問題　　同志社大学　青井　厚
7. 文化圏の再考　　竜谷大学　棚瀬　襄爾

第2室　　司会　中野　清一・姫岡　勤

1. 琵琶湖沖島の通婚関係　　大阪女子大学　光川　晴之
2. 封鎖的漁村に於ける社会統制　　大阪学芸大学　土田　英雄
3. 一漁村の家族的性格
   —琵琶湖に於ける漁村をモデルケースとして—
   京都女子大学　藤田　義憲
4. 飛騨の同姓聚落の実態
   —特にその封鎖性等質性について—　　小原　力
5. 若者宿の類型　　広島大学　八木　佐市
6. 移民母村の構造　　立教大学　中島　龍太郎
7. 芸北山村の農地改革　　広島大学　上田　一雄

《午後の部》

第1室　　司会　樺　俊雄・安西　文夫

1. 子供集団の形成と解消
   —教育社会学の歩み—　　桝田　登
2. 教育社会学における歴史的方法　　徳島大学　粟津　龍智
3. デューイにおける個人と社会　　徳島大学　平木　正直
4. ズナニエッキの社会学の立場　　同志社大学　橋本　真

5. 「福祉社会学の構想」方法論を中心として
神戸女学院大学　雀部　猛利
6. 「社会」の実存学的把握の試み　岐阜大学　松野　達雄
7. 社会構造の把握の二つの方向　大阪市立大学　安西　文夫

第2室　司会　小山　隆・岸川　八寿治

1. 播州三木に於ける金物工業労働力の構成　関西学院大学　定平　元四良
2. 公営企業における京都交通労働組合と神戸交通労働組合の比較　神戸市役所　藤田　正雄
3. 徳島郷土社会の研究について　笠井　藍水
4. 社会学に於ける実験的方法について　和歌山大学　西田　春彦
5. 面接調査に於ける調査員バイアスに就いて　大阪大学　領家　穣
同　田中　直彦
6. 農村社会福祉の問題　立教大学　横山　定雄
7. 原爆孤児の類型　広島大学　中野　清一

第3室　司会　大道　安次郎・竹中　勝男

1. 宗教的人間の定型　竜谷大学　鈴木　宗憲
2. 宗教改革期における西南ドイツ社会　徳島大学　富本　健輔
3. 近代初期に於けるイギリス社会　大阪女子大学　阪井　敏郎
4. 近代社会とアノミー　関西学院大学　岡本　千秋
5. マス・コミュニケーションと近代社会　神戸大学　西村　勝彦
6. 人間苦と社会苦　徳島大学　富野　敬邦
7. 愛国心　京都大学　臼井　二尚

公開講演会

(1) 徳島市　6月28日（土）

森戸　辰男
社会的流動　林　恵海
流行論　臼井　二尚

(2) 鳴門市　6月29日（日）

社会学と経済学との交渉　高田　保馬
福祉に於ける社会と経済　竹中　勝男

(3) 牟　岐　町

戦後の社会心理について　蔵内　数太

日本の人口問題　中野　清一

(4) 池　田　町

当面する家族問題　小山　隆

日本文化の重層性について　大道　安次郎

第4回大会

時　昭和28年5月23日(土)・24日(日)
於　南山大学

《第1日　午前の部》

第1室　司会　富田　嘉郎・難波　紋吉

1. 行動の基礎研究　名古屋大学　小口　信吉
2. 近代ビューロクラシーに於ける合理性と非合理性　京都大学　野崎　治男
3. マックス・ウエーバーに於ける社会的行為の合理性と非合理性　三重大学　長谷川　昭彦
4. マックス・ウエーバーの価値概念の諸相とその社会学との関係　岐阜大学　松野　達男
5. 文化の世界的関連性に関する一考察　稲沢女子短期大学　野一色　利衛
6. 文化概念　関西学院大学　岸川　八寿治

第2室　司会　小松　堅太郎・秋葉　隆

1. 科学と宗教と哲学　名古屋工業大学　池田　長三郎
2. 社会統制論の系譜　大阪学芸大学　土田　英雄
3. 社会体制と教育類型（その1）—教育社会の基本的性格—　神戸市立須磨高校　桝田　登
4. 生徒集団に作用する階級的因子に就いての研究　愛知学芸大学　橋爪　貞雄
5. 愛知県定時制高等学校の実態と問題点に就いて　愛知教育文化研究所　青木　義憲
6. 滋賀県に於ける学校卒業生の動向に就いて　滋賀大学　土屋　貞蔵

《午後の部》

第 1 室　　司会　井森　陸平・森　東吾

1. 発　明　姫路工業大学　長谷川　寅雄
2. ソシオメトリイに関する一考察　和歌山大学　西田　春彦
3. 村落社会福祉実態調査の問題　徳島大学　富野　敬邦
4. 村落に於ける宗教の社会的機能　—愛媛県富郷村の実態調査—
   京都工芸繊維大学　豊嶋　覚城
5. 漁村に於ける二つの社会構造　—特に和歌山市雑賀崎田野を中心とする—
   近畿大学　川崎　恵璋
6. 日本に於ける沿岸及び沖合漁業の保全に関する調査
   —特に九十九里浜漁村を対象とする—
   慶応義塾大学　米山　桂三

第 2 室　　司会　小山　隆・姫岡　勤

1. 社会心理学の性格に就いて　甲南大学　増田　光吉
2. Family Disorganization に就いて　神戸女学院大学　雀部　猛利
3. 名古屋市に於ける離婚に就いて　南山大学　山根　常男
4. ソヴィエート家族に於ける家族関係の変化に就いて
   —R・シュレジンガーその他文献的間接的資料による—
   大阪市立大学　大橋　薫
5. 医師と世襲（小都市の場合）　南山大学　小関　藤一郎
6. 家庭環境と性格の関係に関する一調査　大阪市立大学　上子　武次
7. 封建道徳に表われたわが国近世の夫婦関係　京都大学　姫岡　勤

《第2日　午前の部》

第 1 室　　司会　大道　安次郎・坂田　太郎

1. 社会変動論に関する一考察　神戸大学　向井　利昌
2. 中国の武将類型　滋賀大学　大谷　孝太郎
3. 階級意識の諸相　大阪社会事業短期大学　中本　博通
4. 支配過剰の法則　同志社大学　小松　堅太郎

第 2 室　　司会　安西　文夫・富野　敬邦

1. 名古屋に於ける少年犯罪の分布に就いて
   名古屋少年鑑別所　藤田　弘人

2. 金沢市に於ける地域と犯罪との関係に就いて　金沢大学　四方　寿雄

3. 都市社会に於ける通婚圏に就いて　大谷大学　池田　義祐　佐々木　永滋

4. 都心社会の性格　東京都庁　磯村　英一

☆ 渥美半島に於ける沿海漁村の綜合的調査研究報告

1. 序　説　愛知大学　秋葉　隆

2. 家族の構造と機能　同　川越　淳二

3. 村落の類型　同　村武　精一

4. 信仰と行事　同　秋葉　隆

5. パーソナリティ　同　島本　彦次郎

公　開　講　演

(1) 名古屋市　23日（土）

文化の接触に就いて　蔵内　数太

東亜と西亜の自然と社会　臼井　二尚

(2) 岐阜市　24日(日)

民主的教育の理想と現実　難波　紋吉

水と社会　臼井　二尚

第4回大会の思い出

小関　藤一郎

第4回大会は南山大学で開かれたが、これは関西社会学会が名古屋地区で開かれることになった皮切りである。開設後日の浅い南山大学で関西社会学会が開かれるようになったのは、故小松堅太郎教授が南山大学に講義に来ておられ、同教授が南山大学当局に話をすすめられた結果である。大会は30名以上の発表者があり、非常に盛会であったが、今日の規模から考えると雲泥の相違がある。この大会では蔵内先生など何人かの方に地方講演をお願いしたり、地元の中日新聞から若干の資金の援助を頂いたため、故姫岡勤教授をはじめ、何人かの方々に原稿の御寄附を頂いたこともあった。考えてみると、当時の学会は

大会を催すのにも財政的基盤が弱かったため、開催校にしても、事務局をひきうけた大学にしても、財政上の配慮がなみなみならなかったようである。

第5回大会

時　昭和29年5月29日(土)・30日(日)
於　関西大学

《第1日　午前の部》

第1室　司会　小松　堅太郎・樺　俊雄

1. 田口鼎軒の社会理論の背景について　関西学院大学　定平　元四郎
2. 法社会学の一面　岐阜薬科大学　澤登　定教
3. トレルチの宗教社会学　京都工芸繊維大学　豊嶋　覚城
4. ウエーバーの支配論に於ける分析方法について　大阪大学　高橋　純平
5. T・ガイガーに於ける社会的成層に関する一考察　大阪大学　大本　晋
6. ソシオメトリーに関する一考察（その2）—学級内の差別事象の研究—　和歌山大学　西田　春彦
7. 開拓部落に於ける農家の Socio-economic status の測定　北海道大学　金山　弘夫

第2室　司会　安西　文夫・富野　敬邦

1. 戦後における青年期道徳意識の実態　—その一断面—　大阪大学　久保田　勉
2. 地域と少年非行　—鳥取県下に於ける場合—　鳥取少年鑑別所　橋本　重三郎
3. 受刑者分類収容に於ける社会学的視野　大阪市立大学　大藪　寿一
4. 貧困世帯の特質　大阪社会事業短期大学　中本　博通
5. 都心の決定について　—宝塚市の場合—　関西学院大学　藤本　丁卯治
6. 公益質屋利用者階層の構造（実態調査報告）　神戸女学院大学　雀部　猛利
7. 徳島県南漁村福祉の実態　徳島大学　富野　敬邦

《午後の部》

第1室　司会　難波　紋吉・富田　嘉郎

1. リッカートの社会科学方法論　京都大学　仲村　祥一

2.　　大阪大学　領家　穣

3. 認識社会学成立の問題　立命館大学　鈴木　宗憲

4. 社会の実存論的理解について再論　岐阜大学　松野　達男

5. 文化概念　関西学院大学　岸川　八寿治

6. テクノロジー史観　姫路工業大学　長谷川　寅雄

7. 産業社会学の一考察　中野　正直

8. 産業社会学の二つの方針　横浜市立大学　早瀬　利雄

第2室　司会　大道　安次郎・池田　義祐

岩手県における一農村の調査報告

1. 序説　京都大学　臼井　二尚

2. 開放と封鎖　同　益田　庄三

3. 等質性と異質性、伝統性と変動性　同　角　節郎

4. 非合理性と合理性　同　前田　卓

5. 生活の共同と分離　同　中　久郎

6. 主情性と非情性、調和と不調和　大阪女子大学　阪井　敏郎

7. 政治的側面、経済的側面　立命館大学　野崎　治男

8. 村落生活の諸相　（幻燈）

第3室　司会　小山　隆・姫岡　勤

1.　　稲沢女子短期大学　野一色　利衛

2. 近代初期に於けるロシヤの家族　京都大学　村井　研治

3. 離婚の実態について　愛知県立女子短期大学　四方　寿雄

4. 新興宗教成立の社会的地盤　米子西高校　生田　清

5. マス・コミュニケーションと社会教育
名古屋市教育委員会　榎本　立二

6. ドイツファシズムの心理構造
—特にキャントリル及びラスウエルの解釈を中心に—
名古屋大学　佐々木　光

7. 国際緊張理論の研究　浪速大学　岡村　久雄

8. 教師の社会的態度　南山大学　小関　藤一郎

《第2日》

第1室　司会　中野　清一・棚瀬　襄爾

1. 近代社会に於ける競争　三重大学　長谷川　昭彦
2. 未開社会の一考察　京都大学　桧垣　巧
3. 未開芸術の社会学的考察　京都大学　品川　清治
4. 集団化の諸次元　大阪市立大学　中島　龍太郎
5. 地域社会の時間的構造について　岡山大学　古野屋　正伍
6. 社会学の基本概念としての封鎖性　大谷大学　池田　義祐
7. 言葉について　日本大学　馬場　明男

第2室　司会　井森　陸平・森　東吾

1. 漁村に於ける次三男問題　—広島県尾道市吉和の場合—
関西学院大学　余田　博通
2. 能登における主として定置漁業を営む漁村の社会構造に関する実態
金沢大学　森　正夫
3. 日本の沿岸及び沖合漁業の保全に関する調査
慶応義塾大学　松本　幹雄
4. 千葉県九十九里浜漁村に於ける岡部落と浜部落との関係
—片貝町と蓮沼村の二類型について—
慶応義塾大学　仲　康
5. 漁村に於ける過剰人口の問題　島根大学　山岡　栄市
6. 中間地帯に於ける農地改革　—広島県豊田郡大草村の事例—
広島大学　上田　一雄
7. 富山県礪波地方散居郡落の調査　金沢大学　井森　陸平

第5回大会の思い出

上林良一

昭和29年5月29、30日に開催された第5回大会は、つい昨日のことのように、鮮明な印象で記憶にのこります。第1に、何といってもそれは、恩師岩崎卯一先生の思い出とはなれがたい。その年の4月、社会学の専攻者として法学部助手を拝命し、旬日を経ずして関西社会学会大会の準備にかかったのは、岩崎先生と臼井二尚先生のもとでした。社会学専攻者を法学部助手として養なったのは関大の英断であり、それが今日さかんになった政治社会学の端緒でありました。第2に、岩崎先生と臼井先生から勧められて学会報告を行なったのも

この大会のことでした。そのときの報告「圧力団体抬頭の社会学的原因」が、寺川末治郎先生や阪井敏郎教授等の知遇をうる機縁となりました。

第5回大会の行なわれた当時の大学院学舎は、いま新築されて4階建の威容をほこり、その名も「岩崎記念館」と呼称されることになりました。

昭和49年10月5日

第6回大会

時　昭和30年5月28日(土)・29日(日)
於　金沢大学

《第1日　午前の部》

第1室　司会　安西文夫・森東吾

1. 社会統制としての分散的制裁　京都大学　中久郎
2. オーソリティ概念についての比較研究　大阪大学　高橋純平
3. 産業革命　姫路工業大学　長谷川寅雄
4. National Aggressiveness と民族意志説　浪速大学　岡村久雄
5. 社会統制に関する一問題　大阪市立大学　森好夫

第2室　司会　富野敬邦・池田義祐

1. 農村社会に於ける宗教的社会集団について　大谷大学　堀尾昌純
2. 農民の社会意識　愛知大学　川越淳二
3. 農村社会成層の研究
   ① 成層研究の諸方法とその相互関係　大阪市立大学　山本登
   ② 社会的態度の潜在構造分析　和歌山大学　西田春彦
4. 電源開発と山村社会の変革　―庄川上流の白川村と荘川村の場合―　富山大学　小寺廉吉

《午後の部》

第1室　司会　森好夫・阿閉吉男

1. ビューロークラシーの理論的考察　―米国社会学者の最近の諸傾向―　関西学院大学　萬成博
2. ドッドの社会学について　大阪大学　領家穣
3. 実験構想に於ける Reference Groups の概念　大阪市立大学　大藪寿一

4. マス・コミュニケーションの技術的基底　中央大学　佐藤　智雄
5. Status と Role について　日本大学　馬場　明男

第 2 室　司会　大道　安次郎・青井　厚

北陸地方に於ける講の調査報告

1. 北陸地方に於ける講の現況　金沢大学　井森　陸平
2. 能登における講の実態　同　橋本　芳契
3. 北陸における講の歴史的背景について　同　若林　喜三郎

第 3 室　司会　棚瀬　襄爾・姫岡　勤

1. 明治以後に於ける我国家長制家族の集団的統一性
　—主として明治大正文芸を通じてみたる—
　京都大学　河村　雷雨
2. 家計の状況と親の教育的態度　—両親の教育的態度の調査研究—
　桝田　登
3. 祖先崇拝発生の社会的基礎　京都大学　前田　卓
4. 未開社会の一考察　京都大学　檜垣　巧
5. 社会人類学の領域　竜谷大学　棚瀬　襄爾

《第 2 日》

第 1 室　司会　富田　嘉郎・小関　藤一郎

1. 等質性及び異質性の測定　京都大学　高津　等
2. 大都市におけるサラリーマン家族と商業者家族の比較調査
　甲南大学　増田　光吉
　大阪女子大学　光川　晴之
3. 都市社会学における基本概念としてのドミナンス概念の一考察
　大阪学芸大学　横山　亮一
4. 名古屋市の移入人口についての一調査　南山大学　小関　藤一郎

第 2 室　司会　桜井　庄太郎・江藤　則義

1. 漁村社会の階層構造について　京都大学　角　節郎
2. 村落調査の社会学的論点　近畿大学　川崎　恵璋
3. 塩田村鳴門高島の調査　徳島大学　富野　敬邦
4. マックス・ウエーバーと現代　関西学院大学　マックナイト

公　開　講　演　会

『政治的支配の型』　関西大学学長　岩崎　卯一

『三つの帝国主義論』　大阪大学経済学部長　高田　保馬

第6回大会の思い出

井森陸平

金沢大学での大会開催は、私としては初めての経験であり、故森正夫先生と一緒に会場の準備や費用の調達に奔走したためもあり、思い出が深い。当時は学会事務局は色々面倒をみておられたが、特に臼井先生には、委員長として挨拶廻りなどを煩わしたようにも記憶している。何分不慣れのため、行き届かないこともあったと思うが、現在までに、北陸地方で開かれた唯一の大会であったということだけでも、皆さんの記憶に残っていたら幸いである。公開講演会には、高田保馬、岩崎卯一の両先生に講演をお願いしたが、大学の内外から沢山の聴講者が集まり、今もその夜の盛況がまのあたりに見えるようである。高田保馬先生は、この時のことを歌に詠んでおられるが、その一つに、

「次ぎ次ぎに一日生命の紫を映せば終るかかきつばたの花」

というのがあり（『望郷吟』87頁）、その項来講された磯村英一兄が、色でいえば金沢の特徴は紫だ、といわれたのと不思議に符合する。

第7回大会

時　昭和31年5月26日(土)・27日(日)
於　関西学院大学

《第1日　午前の部》

第1室　司会　森　好夫・江藤　則義

1. 自由民権運動の時期とハーバード・スペンサー
—社会平権論をめぐって—
名古屋大学　山田　隆夫
2. モラールの社会的条件について　京都大学　仲村　祥一
3. 集団構造と社会統制の関係　—ホーマンズの所説を中心として—
大阪大学　高橋　純平

4. 禁欲と社会統制　和歌山大学　今崎　秀一

第2室　司会　井森　陸平・棚瀬　襄爾

1. 日本封建社会の芸術の社会学的考察　京都大学　品川　清治

2. 日本中間市民層の宗教　—生長の家の宗教社会学的考察—
立命館大学　鈴木　宗憲

3. 若狭に於ける宗教的講の調査報告

① 講の種類と構造　京都大学　池田　義祐

② 講に対する態度調査　京都工芸繊維大学　豊嶋　覚城

4. 北陸地方に於ける講の調査報告 (3)　金沢大学　井森　陸平

《午後の部》

第1室　司会　安西　文夫・小関　藤一郎

1. 役割理論の展開における G. H. ミードと
T. M. ニューカムの学説について
関西学院大学　萬成　博

2. パーソンズの行為の理論について　南山大学　小関　藤一郎

3. アメリカ社会学における「理論」について
大阪市立大学　安西　文夫

4. アメリカ社会学の発端について　横浜市立大学　早瀬　利雄

第2室　司会　姫岡　勤・富野　敬邦

1. 農奴制時代のロシヤの父権　京都大学　村井　研治

2. 親子関係にあらわれた家族性の地域差について
大阪市立大学　吉井　藤重郎

3. 社会学と精神分析　—家庭における人間関係と教育—
神戸市教育研究所　桝田　登

4. 家族と技術　姫路工業大学　長谷川　寅雄

《第2日　午前の部》

第1室　司会　富田　嘉郎・桜井　庄太郎

1. 「社会的圧力と服従的態度」に関する実験的研究
大阪市立大学　大藪　寿一

2. 通信網分析の方法について　大阪大学　領家　穣

3. 郵送法による中小教員の職業に対する態度調査

① 教員の教職に対する安定感の潜在構造分析

和歌山大学　西田　春彦

② 郵送法における調査票回収速度の Stochastic analysis

同　池田　一貞

③ 教員の教職に対する安定感の因子分析　同　堀内　郁雄

4. 社会的状況の決定　大阪市立大学　中島　龍太郎

第2室　司会　阿閉　吉男・渡辺　洋二

1. 名古屋市における菓子屋街の調査　瑞陵高校　谷口　茂
2. 漁業部落の住居の密集とその意義　京都大学　益田　庄三
3. 部落生活の実態調査報告　大阪社会事業短期大学　中本　博通
4. 職業観からみた農民の社会的性格　—ある山村の一実例—

愛知大学　川越　淳二

同　牧野　由朗

《午後の部》

司会　喜多野　清一・伊藤　規矩治

☆ 宝塚市の綜合調査研究

1. 序　論　関西学院大学　大道　安次郎
2. 宝塚市の地域構造　同　藤本　丁卯治
3. 宝塚市の観光地域の社会構造　—旅館地区を中心として—

同　大道　安次郎

4. 宝塚市における住宅地域の形成について　—特に土地を中心として—

大阪市立大学　渡辺　久雄

5. 農村社会構造の分析　—安倉部落を中心として—

関西学院大学　余田　博通

第7回大会の思い出

大道　安次郎

第7回大会は関西学院大学で開かれた。当時私は同大学文学部社会学科の主任教授をしていたので、余田、領家、定平、万成、その他同研究室関係の諸君と舞台裏の苦労をともにしたことも、いまは楽しい思い出となっている。

学会報告では、アメリカ社会学の影響が漸く現われかけていたことが印象に

残っている。また私たちの研究室中心に「宝塚市の綜合調査研究」の共同発表を行った。いまにして思えば、一昨年出版した私の「周辺都市の研究ー宝塚市のケース・スタディー」が、その頃からはじめられていたことになる。

あれからもう20年近く経っている。当時の研究発表者、参加者の多くは、いまでは第一線で活躍されているが、その間にあって奈良女大の桜井庄太郎さん、京大の棚瀬襄爾さん、大阪市大の中島龍太郎さんがこの世を去っていることは淋しいことである。ご冥福を祈っている。

第8回大会

時　昭和32年10月26日(土)・27日(日)
於　三重大学

《第1日　午前の部》

第1室　司会　阿閉吉男・青井厚

1. 視線意識の相互性について　京都大学　檜垣巧
2. T. Geiger のイデオロギー論　大阪大学　大本晋
3. T.Parsons における Basic Personality 構造　奈良学芸大学　永田陸郎
4. Muckerjee の価値論　関西学院大学　定平元四良

第2室　司会　甲田和衛・川越淳二

1. 社会意識の測定　西京大学　園直樹
2. 階級所属意識測定法の比較吟味　愛知大学　井森陸平
3. パネル法における回答の安定性　大阪大学　甲田和衛
4. Multivariate Analysis について　—テレビ視聴調査を中心として—　大阪大学　甲田和衛　同　湯浅良之助
5. 線垣計画法の適用について　和歌山大学　西田春彦　同　池田一貞

第3室　司会　清水盛光・富野敬邦

1. マッピングの意味　大阪大学　領家穣
2. 大都市の区の適正な区分について　名古屋工業大学　富田嘉郎　瑞陵高校　谷口茂
3. 未解放部落に関する若干の考察　大阪大学　上田一雄

4. 一山村に於ける村落支配と宗教管理の方式
愛知学芸大学　林　稲苗

《午後の部》

第1室　司会　森　好夫・堀　喜望

1. 政治社会学の構成について　関西大学　上林　良一
2. ビューロクラシーの逆機能について　大阪市立大学　筆谷　稔
3. 権力史観の構想　近畿大学　後藤　文利
4. 家族の近代化と老人　関西学院大学　大道　安次郎

第2室　司会　今崎　秀一・河井　常三郎

1. 日本芸能の社会学的考察　大阪外国語大学　品川　清治
2. 忠誠における交換則の存在について　大阪学芸大学　村田　迪雄
3. 宗教的儀礼の意味　大阪大学　森　東吾
4. かくれ切支丹の研究　関西学院大学　倉田　和四生
5. 日本資本主義の発達と新宗教の倫理　—とくに金光教と前期大本教—
立命館大学　鈴木　宗憲

第3室　司会　小関　藤一郎・渡辺　洋二

1. 徳島県における選挙の生態調査　徳島大学　富野　敬邦
2. アパート居住家族の生活と意識　甲南大学　増田　光吉
3. 地方都市居住者の意識形態
—とくに伝統的生活規範意識の変貌について—
愛知大学　川越　淳二
同　牧野　由朗
4. 電器産業従業員のモラールの諸要因　関西学院大学　萬成　博
5. Leadership Training in Industrial Organizations
コルゲート大学　W.H. Bash

《第2日》

第1室　司会　姫岡　勤・佐藤　輝美

熊野灘沿岸の漁村の実証的研究

(1) 封鎖性・開放性　愛知女子大学　村井　研治
(2) 社会構造と生活の共同　三重大学　長谷川　昭彦
(3) 婚姻成立の人間関係　三重大学　佐藤　輝美

(4) 離婚と犯罪　愛知女子大学　四方　寿雄
(5) 迷信と漁民の社会的性格　京都大学　益田　庄三
(6) 漁民生活の実態（映画とスライド）　大阪外国語大学　品川　清治

第2室　司会　桜井　庄太郎・中島　龍太郎

未解放部落の社会構造

(1) 鳥取県下における未解放部落の歴史と現状　米子高校　生田　清
(2) 人口増加と家族制度　大阪市立大学　上子　武次
　同　山本　登
(3) 家族生活と婦人の地位　同　中川　喜代子
(4) 生活水準の測定　同　山本　登
(5) 経済構造と労働事情　大阪盲学校　諏訪園　岩雄
(6) 政治構造と解放運動　大阪市立大学　中島　龍太郎
　同　大藪　寿一

公開講演

(1) 松阪市
　円満な結婚の条件　井森　陸平
　世界平和の諸方式　難波　紋吉
(2) 津市
　集団の中の人間　安西　文夫
　日本人の責任観念　臼井　二尚
(3) 伊勢市
　人間関係の問題　富田　嘉郎
　民主主義と教育　喜多野　清一
(4) 四日市市
　若い世代と今後の家族の問題　大道　安次郎
　愛国心の問題について　高田　保馬

第8回大会の思い出

長谷川　昭彦

昭和32年といえば、日本は戦災の痛手から立ち直り、新しく高度成長をはじ

めようとする時期であった。三重県津市においてもやっと三重会館という建物ができて、学会の懇親会場確保のめどがついた時期であった。そして社会学という学問も、三重県のような地方ではまだまだ一般には理解されていない状態であった。そこで県内の4都市で、社会学のPRを兼ねて、長老の8名の先生方に講演をお願いしたことも、この大会の特記すべきことであった。

当時、三重大学の社会学関係者は主任の佐藤輝美氏と私の2人だけであった。この佐藤氏のご令室が32年3月に急逝されるという出来事が生じた。しかし、この年の日本社会学会が、8月17、18日に札幌で開かれることになったため、関西社会学会は10月26、27日に開かれた。これが例年通り5月ということであれば、主催校が主となった綜合研究「熊野灘沿岸漁村の実証的研究」(後に「ソシオロジ」19号に所収)の発表はいうにおよばず、学会の開催それ自体も返上しなければならなかったかもしれぬとは、佐藤氏の述懐であった。

第9回大会

時　昭和33年5月31日(土)・6月1日(日)
於　和歌山大学

《第1日　午前の部》

第1室　　司会　井森　陸平・伊藤　規知治

1. モデル設計の条件について　大阪大学　領家　穣
2. 潜在的状況とその調査化
   —タマス、パースンズ、ラザースフエルトからタンゼントへ—　西京大学　園　直樹
3. 重因子分析法の適用について　和歌山大学　西田　春彦・池田　一貞
4. 相互依存関係の数理的展開　同　池田　一貞・西田　春彦
5. 都市住民の社会意識の測定　日本福祉大学　吉岡　進

第2室　　司会　富野　敬邦・横山　亮一

1. インド農民の社会的適応について　岡山大学　古屋野　正伍
2. 明治期における共有林野の解体過程と村落秩序の変遷について

—とくに愛知県宮崎村の場合を中心として—

愛知学芸大学 { 後藤 和夫 / 神谷 力 }

3. 都市化の理論としての Folk-Urban Continuum の概念について

大阪学芸大学 横山 亮一

4. 徳島市における選挙政治意識の実態調査 徳島大学 富野 敬邦

5. 分家形態と家産分与 大阪大学 喜多野 清一

第 3 室 司会 堀 喜望・安西 文夫

宝塚市の綜合調査（中間報告）

① 序 論 関西学院大学 大道 安次郎

② 農村地区の問題 同 余田 博通

③ 住宅地区の問題 —仁川住宅を一例として—

大阪市立大学 渡辺 久雄

④ 病理的側面 関西学院大学 大道 安次郎

《午後の部》

第 1 室 司会 大道 安次郎・小関 藤一郎

1. Soziale Ordnung の概念について 大阪大学 大本 晋

2. { 文化<社会体系 / パースナリティ>役割 } の関係

—パースンズ理論の展開について— 関西学院大学 宇賀 博

3. システムの曲面運動に関する一考察

—とくにベイルズの枠組を中心として— 関西学院大学 牧 正英

4. 役割理論の諸問題 大阪市立大学 筆谷 稔

5. 構造機能分析法の展開 関西学院大学 倉田 和四生

6. T. パースンズの社会階層論の特質 神戸大学 長谷川 善計

第 2 室 司会 今崎 秀一・桜井 庄太郎

1. 子供の職業意識について ——つの調査を手がかりに—

神戸教育研究所 桝田 登

2. 家元制度の研究 —茶道表千家流茶匠の実態—

大阪市立大学 中川 喜代子

3. 茶道の文化社会学的一考察 大阪大学 倉橋 重史

4. 神秘主義と禁欲主義 大阪大学 森 東吾

5. 最近の日本人に現われた危機思想 立命館大学 鈴木 宗憲

6. 思想の抽象性とその社会的意味　大阪学芸大学　村田　迪雄

第 3 室　司会　姫岡　勤・土屋　貞蔵

都市および農村における通婚圏総合調査（中間報告）

① 調査の意図・方法および経過　京都大学　池田　義祐

② 山村における通婚圏の構造　同　池田　義祐

③ 漁村における通婚圏の構造　大阪電気通信短期大学　益田　庄三

④ 未解放部落における通婚圏の構造　神戸大学　杉之原　寿一

⑤ 地方新興都市における通婚圏の構造　三重大学　長谷川　昭彦

《第 2 日》

第 1 室　司会　森　正夫・富田　嘉郎

1. レッド・テープと体制　大阪商業大学　仲村　祥一

2. 産業における非公式組織の分類について　愛知大学　井森　陸平

3. Betrieb als soziales Gebilde　同志社大学　伊藤　規矩治

4. リーダーシップと集団の生産性
—電器産業従業員の人間関係に関する一調査—
関西学院大学　萬成　博

5. P.R. の新しい解釈について　名古屋工業大学　富田　嘉郎

第 2 室　司会　棚瀬　襄爾・阿閉　吉男

1. 家族機能と役割行動の一研究　—大阪市内小地域の調査資料から—
大阪市立大学　大橋　薫

2. 近世の町人家族　—家業を中心として—
京都市立看護短期大学　河村　雷雨

3. 家業意識の概念とその実態　{ 立命館大学　野崎　治男 / 京都大学　角　節郎 }

4. 志摩半島の海女の地位について　大阪府立女子大学　阪井　敏郎

第 3 室　司会　池田　義祐・作田　啓一

伊豆の漁村（めら）の綜合調査報告

① 概観（スライド使用）　京都大学　臼井　二尚

② 封鎖性・開放性　同　会田　彰

③ 生活の共同・分離　同　高島　昌二

④ 等質性・異質性　同　宮城　宏

⑤ 伝統性・変動性　同　口羽　益生

⑨ 即自性・対自性　　大阪電気通信短期大学　益田　庄三

⑦ 調和性・不調和性　　東京都庁　佐藤　文男

第9回大会の思い出

今崎秀一

第9回大会は、快晴に恵まれて、和歌山大学教育学部において開催された。研究報告者47名（研究報告数34、うち共同研究3を含む）に上り、参加者は会員98名を含んで118名に達した。前年度大会が、日本社会学会大会の関係上、10月に繰越され、そのため本大会までの期間は、半年余にしか過ぎなかったにもかかわらず、前年研究報告者を上まわる盛況であった。今回は9部会に分れ、社会学理論ならびに研究法、および家族・農村・都市・文化に亘って、活発な研究報告と質疑・応答が行われた。

総会は蔵内委員長の挨拶にはじまり、難波委員が座長席について、議事が進められた。総会で特に問題となったことは、シンポジウム形式の一部採用を求める提案で、その具体的な方法については、委員会で研究することになった。総会に引続いて行われた懇親会でも、会員相互に活発な意見が交換された。

閉会後、和歌山大学の好意で、会員50余名が参加して紀三井寺その他の見学を行った。大会の事務的な準備は学会事務局とともに、和歌山大学の今崎秀一、西田春彦がこれに当った。

第10回大会

時　昭和34年5月29日(金)・30日(土)
於　愛知大学

《第1日　午前の部》

第1室　　司会　阿閉吉男・作田啓一

1. Community 記述の理論　　大阪大学　光吉利之
2. 社会体系の概念について　—その基礎的諸課題の検討—　　関西学院大学　牧　正英
3. T. パースンズにおける構造機能分析の展開

— from pattern variables to dimension —
関西学院大学　倉田　和四生

4. 社会人類学における社会構造研究の問題点　京都大学　口羽　益生

5. 集団成員の補充　大阪市立大学　森　好夫

第2室　司会　桜井　庄太郎・棚瀬　襄爾

1. 日本文明解明への一つの作業仮設　関西学院高等部　志賀　大郎

2. 儀礼の逆機能　大阪大学　森　東吾

3. 戦後日本のキリスト教会　—地方都市における一事例について—
愛知学芸大学　林　稲苗

4. インド原住民のヒンドゥ化について　岡山大学　古屋野　正伍

第3室　司会　伊藤　規矩治・富田　嘉郎

1. ソーシアル・モビリティと労働者階級の連帯性
京都大学　会田　彰

2. 職業適性の予見性について　—適性の社会的条件を中心に—
神戸市立教育研究所　桝田　登

3. 組織の有効性
Ⅰ　経営者の役割と従業員のモラール　関西学院大学　萬成　博
Ⅱ　リーダーシップと研究員のモラール　同　佐原　福磧

第4室　司会　安西　文夫・森　正夫

大阪市の社会解体地域についての総合研究

① 序論　大阪市立大学　安西　文夫

② 地域構造
- 大阪学芸大学　土田　英雄
- 大阪市立大学　吉井　藤重郎

③ 人口移動
- 大阪学芸大学　横山　亮一
- 大阪市立大学　吉井　藤重郎

④ 家族・婦人・学童・乳幼児
- 大阪府立女子大学
  - 阪井　敏郎
  - 光川　晴之
- 大阪社会事業短期大学
  - 碓井　隆次
  - 三浦　賜郎

⑤ 近隣・小集団
- 大阪学芸大学　横山　亮一
- 大阪府立女子大学　光川　晴之

⑥ 社会意識
- 和歌山大学　今崎　秀一
- 大阪府立大学　岩坪　紹夫
- 大阪商業大学　仲村　祥一

⑦ 生活問題

奈良学芸大学	寺川	末次郎
大阪社会事業短期大学	中本	博通
大阪学芸大学	土田	英雄
京都大学	小関	三平

《午後の部》

第1室　司会　姫岡　勤・堀　喜望

1. 秩序の概念について　大阪大学　大本　晋
2. 中範囲の社会学的集団への試論　関西学院大学　宇賀　博
3. 力関係の理論　関西大学　吉田　民人
4. fiction の社会的機能について　大阪学芸大学　村田　廸雄

第2室　司会　小関　藤一郎・土屋　貞蔵

1. 和歌山・熊野山村における非長子相続（父分家）制について
   - 大阪市立大学　中川　喜代子
   - 大阪市立盲学校　諏訪園　岩雄
2. 高野山門内町商店街の成立　高野山大学　中野　三郎
3. 近世大阪の人口の推移　京都大学　高津　等

第3室　司会　大道　安次郎・富野　敬邦

1. 大学生の学生生活に関する若干の態度　—和歌山大学の場合—
   - 和歌山大学　今崎　秀一
   - 西田　春彦
   - 池田　一貞
2. マスコミの実態調査　徳島大学　富野　敬邦
3. 投票の地域性　—宝塚市議選挙の場合—　関西学院大学　大道　安次郎

第4室　司会　井森　陸平・今崎　秀一

西三河平坦農村の実態について

① 概　観　愛知大学　井森　陸平

② 社会経済構造における封鎖性　三重大学　松田　信／長谷川　昭彦

③ 部落の組織と村人の協同生活　愛知大学　島本　彦次郎／牧野　由朗

④ 社会生活における具体的個別性　愛知学芸大学　与曽井　章平／岐阜薬科大学　沢登　定教

⑤ 町村合併における対立の問題　愛知県立女子大学　村井　研治／四方　寿雄

⑥ スライド映写

《第 2 日》

◇シンポジウム

第 1 室　　司会　臼井　二尚

「コンミュニティについて」

① 序　　京都大学　臼井　二尚

② コンミュニティの一般概念　　神戸大学　向井　利昌

③ 村落コンミュニティ　　関西学院大学　余田　博通

④ 都市コンミュニティ　　大阪学芸大学　横山　亮一

⑤ ナショナル・コンミュニティ　　神戸商科大学　中村　正文

第 2 室　　司会　喜多野　清一・川越　淳二
甲田　和衛・山本　登

「社会事象の計量化について」

大阪市立大学　大藪　寿一※

奈良女子大学　執行　嵐※

和歌山大学　西田　春彦※

和歌山大学　池田　一貞

関西学院大学　領家　穣

京都大学　渡辺　洋二

(※は報告者)

第10回大会の思い出

川越　淳二

第10回大会は昭和34年5月29・30両日、関西社会学会の範域では最東端になる豊橋市の愛知大学で開催された。この年は愛知大学にとっても社会学科創立10周年に当る記念すべき年であったが、昭和29年に死去された初代主任教授秋葉隆博士の後任として井森陸平教授が金沢大学から着任されて日も浅く、しかも社会学科のスタッフや学生も少数で、その上老朽の旧軍隊施設を会場にしなければならないことなど、決して万全の準備ができたわけではなかった。加えて戦災都市豊橋の復興は進まず、宿泊施設が貧しかったので、会員の宿泊先の

確保が最大の課題であった。しかし会員各位のご理解と大学事務局の全面的協力をえて、大過なくその任を終えることができたのは望外の幸せであった。緑多い静かな学園での報告には優れたものが多かったし、この大会からもたれたシンポジウムでも、活発な討論が行われたことは学会としても特筆すべき点であろう。なお懇親会には予定をはるかに超えた会員が出席し、大学当局が嬉しい悲鳴をあげたことも付言させていただきたい。

第10回大会シンポジウム

「コンミュニティ」について　　向井利昌

1。序　臼井二尚氏。コンミュニティの概念内容およびその実態の研究の意義と諸問題が指摘された。 2。コンミュニティの一般概念　向井利昌氏。コンミュニティ一般概念についての代表的諸学説を、マッキィヴァの理論を中心として検討し、理論的分析の面からの疑問点を提示した。 3。村落コンミュニティ　余田博通氏。村落の実態研究に関しての日本の代表的見解を比較検討し、村落のコンミュニティ性の特色を論議した。 4。都市コンミュニティ　横山亮一氏。都市に特有のコンミュニティ的性格を、村落と対照させて、把握することをこころみた。 5。ナショナル・コンミュニティ　中村正文氏。国家および民族におけるコンミュニティの構造を、諸学説の対比を通じて吟味した。

第10回大会シンポジウム

「社会事象の計量化」について　　甲田和衛

このシンポジウムがもたれたのは、昭和34年、愛知大学における第10回大会のことである。戦後間もなく川島武宣「社会学における計量的方法の意義とその限界」にしめされているような、社会学への統計学、数学の導入が、なお期待と逡巡がこめられていた時期のことである。発表者・大藪寿一、執行嵐、西田春彦の諸氏が何を報告したかは「報告要旨」にも残されておらず、また討論者・池田一貞、領家穣、渡辺洋二の諸氏が何を討論したかの記憶も薄れている。ただ社会学というよりも調査における変数の問題が討議されたことを想起するのみである。その後15年を経て、なおアメリカ社会学の大きな影響のなかで、

アメリカ社会学会 Sociological Methodology 1969，1970 の2巻の公式出版物について、わが国の社会学会が何をコメントし、どこを批判しえたかを考えるとき、このテーマは再三といわず今後も繰返しとりあげられなければならないだろう。

第 11 回 大 会

時　昭和35年5月28日(土)・29日(日)
於　神　戸　大　学

《第1日　午前の部》

第 1 室　　司会　桜井　庄太郎・森　正夫

1. 社会統制の方法論的考察　高橋　純平
2. 青少年自殺者の家族構成　大谷大学　中　久郎
3. 社会科学と価値恒存法則　近畿大学　後藤　文利
4. 日本的発想の根底にあるものについて　関西学院大学　志賀　大郎
5. 日本におけるユートピア実験
   ～一心境の場合～　大阪市立大学　山根　常男

第 2 室　　司会　喜多野　清一・横山　亮一

1. 旧大地主層の存在形態　同志社大学　松本　通晴
2. 鹿児島における女性の地位について　大阪女子大学　阪井　敏郎
3. 大阪における町人根性の形成　京都大学　高津　等
4. （共同研究）地方都市の生活圏と市民意識
   —概観及び市民生活圏について—
   大阪市立大学　中島　龍太郎
5. （　〃　）　同　上　—市民意識について—
   大阪市立大学　大藪　寿一

第 3 室　　司会　富野　敬邦・今崎　秀一

1. 文化の統合について　京都大学　水野　浩一
2. 教団におけるエリートの動態　浪速短期大学　鈴木　宗憲
3. インド村落構造とカスト制　大阪商業大学　宮城　宏
4. インド村落共同体研究に関する若干の問題　大阪大学　光吉　利之
5. インドに於ける社会構造変化の研究について　岡山大学　古屋野　正伍

《午後の部》

◇ シンポジウム「社会階層」

司会　大道　安次郎・安西　文夫

はじめに　大阪市立大学　安西　文夫

1. 社会成層論　—その基礎的検討—　神戸大学　金沢　実

2. 社会階層の機能　同志社大学　橋本　真

3. 高度資本主義体制と社会階層　神戸大学　向井　利昌

4. 都市の社会階層　—名古屋のばあい—　愛知大学　川越　淳二

5. 階層研究の問題点　—農村を中心として—大阪市立大学　山本　登

《第 2 日》

第 1 室　司会　阿閉　吉男・細野　武男

1. 政党リーダーシップの事例研究　—日本社会党—
京都大学　間場　寿一

2. 官僚の補充について　天王寺第二商業高校　筆谷　稔

3. 組織論における発想の諸形式　京都大学　塩原　勉

4. パーソンズとマートン　京都府立大学　園　直樹

5. ミルズとマートン　大阪市立大学　森　好夫

第 2 室　司会　富田　嘉郎・伊藤　規矩治

1. 産業組織におけるヒエラルキー　京都大学　遠藤　惣一

2. レスリスバーガー「状況論」の吟味　大阪府立大学　渡瀬　浩

3. 現在日本の産業界の指導者の社会移動　関西学院大学　萬成　博

4. （共同研究）中小企業工場のモラール・サーヴェイ
名古屋工業大学　富田　嘉郎

5. （　〃　）名古屋市及びその近郊の二中規模工場に於ける
モラール・サーヴェイの結果について
瑞陵高校　谷口　茂

第 3 室　司会　小関　藤一郎・岡村　久雄

1. diffusion の分析について　電通大阪支社　巽　健一

2. （共同研究）潜在構造分析

(1) T. W. Anderson の潜在構造分析に対する解について
和歌山大学　西田　春彦
同　池田　一貞

(2) IBM 650 型電子計算機による
潜在構造分析のプログラミングについて　和歌山大学　西田　春彦
同　池田　一貞
三和銀行企業合理化委員室　岡村　拓郎
同　山崎　智之

3. 投票行動に現われた農民・漁民・山地住民の政治意識の実態
徳島大学　富野　敬邦

第 4 室　司会　井森　陸平・土屋　貞蔵
(共同研究) ――山村における伝統と変動　―南会津郡桧枝岐村の場合―

1. 村の概観（スライド使用）　京都大学　臼井　二尚
2. 生業における変遷の諸様相　同　天鷲　良雄
3. 生活の共同と分離　京都工芸繊維大学　豊嶋　覚城
4. 調和・不調和　京都大学　山口　素光
5. 即自性・対自性　京都大学　臼井　二尚
6. 変動の諸要因　三重大学　松田　信
京都府立大学　長谷川　昭彦

第11回大会の思い出

堀　喜望

開催校神戸大学は、当時文学部の学舎も建たぬまま、理学部・教養部とともに旧御影学舎に同居中であった。手ぜまのなか、しかも急遽お引受けしたため、いくぶんの危惧をもちつつ、しかし却って同僚諸君の一致のもとで、参加者142名と報告される盛会で幕を閉じることのできたのは幸いであった。

研究報告は、対象の分野を拡大し、かつ極めて活発であった。それらにふれる余地はないが、この大会でインドの村落社会組織の研究がまとまって発表されたことは記憶さるべきである。ただその後、共同の研究の発展をあまり見なかったことは残念である。シンポジウムの「社会階層」の発表は、更に重大化する問題の分野に、多角的な方向づけを示唆するものとして意義をもつものであった。

1960年は、いわゆる「安保」の年である。学会直前の5月19日同条約は衆議院で単独可決された。この全国的に騒然たる渦中にあって、学会は、その総会

の席で、抗議の「反対決議案」の提案を受け、討議のうえ、大会有志の名で「決議文」が発表されることになったのは、また忘れらるべきではないであろう。（なお本大会については、『社会学評論』42号（昭和35．10発行）のなかに、高島昌二氏（当時学会事務局）の筆により誌されている。）

第11回大会シンポジウム

「社会階層」について　　山本　登

Social Stratification ということばは、日本社会学会の共同研究（社会的成層と社会的移動の国際比較研究計画）以来、わが国でも使用されはじめたが、なにぶん、マルクス主義的影響のもとで、「階級論」として論議されてきた伝統のなかでは、成層論的アプローチそのものが未成熟であった。そのかぎり、「社会階層」という、中間的な概念ではあったが、シンポジウムとして取上げる意味もあったのであろう。だからといって、シンポジウムにおける5名の報告者の論議が、十分にからみあったとは思われないし、その後のわが国の研究においても、成層論は不毛のままに推移している。

いま、15年前のことどもを回顧してみると、日本社会の異常ともいえる変化に対して、社会学が、どの程度フオローできたかについて、にがい感慨をもたざるをえない。

第12回大会

時　昭和36年5月27日（土）・28日（日）
於　奈良女子大学

《第1日　午前の部》

第1室　　司会　岡村　久雄・阿閉　吉男

1. 政党における政策決定過程　　京都大学　間場　寿一
2. 寡頭制と民主制　— R. Michels の寡頭制の鉄則について—　　北野高校　居安　正
3. 権力の社会的基礎　　京都大学　高島　昌二
4. 日本の工業化と指導者層の変遷　　関西学院大学　萬成　博

5. 経済成長と社会学の問題　同　小関　藤一郎

第 2 室　司会　阪井　敏郎・豊嶋　覚城

1. 東北村落社会の Personality の特性 (1)　京都大学　天鷲　良雄

2. 労働力流出がもたらす共同体的規制維持の側面について
—鹿児島県の一村落実態調査から—　京都大学　間庭　充幸

3. 都市近郊漁村の老化現象　大阪学芸大学　益田　庄三

4. 丹波地方村落の社会構造
(1) 旧馬路村の概況　同志社大学　橋本　真
(2) 〃　同姓集団の構造　同　松本　通晴
(3) 〃　階層構造　同　橋本　真

第 3 室　司会　富田　嘉郎・甲田　和衛

1. Diffusion Process Model の適用　電通大阪支社　巽　健一

2. 潜在構造分析 (3)　～一般解への接近～　和歌山大学　西田　春彦
同　池田　一貞

3. パネル法における問題点　—新聞購読調査から—
大阪大学　甲田　和衛

第 4 室　司会　森　正夫・川越　淳二

1. 近代家族の理論の問題点　京都大学　金屋　平三

2. 都市生徒の家意識　関西大学　松本　暉男

3. (共同研究)　志摩における妻問い婚　京都大学　姫岡　勤
大阪女子大学　光川　晴之
○ 大阪学芸大学　土田　英雄
京都府立大学　長谷川　昭彦

4. 戦後における心中の実態　京都大学　姫岡　勤

◇ シンポジウム　司会　大道　安次郎・小関　藤一郎
「都　市」　発表者　大道　安次郎
横山　亮一
渡辺　洋二
大橋　薫

《第 2 日》

第 1 室　司会　今崎　秀一・安西　文夫

1. 戦後青年の社会行動　～一つの作業仮説～
京都大学　新　睦人

2. 義理の意識と封建制度　浪速短期大学　高津　等

3. 隠逸風狂の社会的性格　～一休・良寛における～

関西学院高等部　志賀　大郎

4. 宗教意識と法律制度との交渉　—特にインド婚姻法の場合—

愛知学芸大学　実野　利久

5. 祖先崇拝の社会的基礎　富山大学　石瀬　秀治

第 2 室　司会　堀　喜望・細野　武雄

1. 集団の規範と拘束性　大阪大学　大本　晋

2. 組織理論の構想　～一つの試み～　関西大学　吉田　民人

3. 中範囲の実践について　大阪外国語大学　仲村　祥一

4. ユートピアの社会学的概念　大阪市立大学　山根　常男

5. 世界社会の構造　金城学院大学　吉川　氏幸

6. デュルケムの集合意識について　大阪大学　森　東吾

第 3 室　司会　富野　敬邦・伊藤　規矩治

1. 都市と村落における自殺率

(1) 都道府県別自殺統計の検討　京都大学　坪内　良博

(2) 京都府の自殺者の場合　大谷大学　中　久郎

2. 都市化の推移性について　大阪市立大学　吉井　藤重郎

3. 都市化におけるラジオ聴取者の構成変化

—三つの小都市とその周辺農村の場合—　岡山大学　古屋野　正伍

4. スーパーマーケットの実態調査　徳島大学　富野　敬邦

第 4 室　司会　林　稲苗・土屋　貞蔵

(共同研究) 農家の経営改良生活改善普及の過程と要因に関する調査研究

(1) 総　説　甲南大学　井森　陸平

(2) 京都府における農家経営改良生活改善普及の概況

京都府立大学　長谷川　昭彦

(3) 農業技術の普及とインフォーマルリーダー

愛知学芸大学　与曽井　章平

(4) 渥美半島における温室栽培の普及について　愛知大学　川越　淳二

(5) 碧海地方における稲作技術改良の普及について　同　島本　彦次郎

(6) 山村における林産技術の普及について　愛知学芸大学　後藤　和夫

(7) 梨栽培及びその新技術の導入普及過程と農民の営農意識について

愛知大学　牧野　由朗

(8) 農村における産児制限知識の普及過程について

愛知県立女子大学　四方　寿雄

第12回大会の思い出

井上公正

本大会は5月27・28両日快晴に恵まれて奈良女子大学で開催された。大会の裏方は故桜井庄太郎、執行嵐と私、それに少数の専攻学生だけ、そこで京都大学・大阪大学の方々が応援して下さって、とても心強かった。とくに事務局の京都大学の高島昌二さんから、大会運営にあたり準備すべき必要事項を前もって詳細に指示されたことは大助かりであった。運営費が非常に少なく、委員・一般会員の懇親会はまことにお粗末なものになったが、むしろ簡素にやる先駆になろうというのが裏方の趣意であった。不馴れでトラブルもあったが、会員の御厚意でなんとか無事に終了することができた。忘れえぬほほえましいことは、手伝って下さった若い研究者と本学学生とが大会が縁となって、後に結ばれたことである。大会開催にあたり御協力やお手伝い下さった喜多野清一先生はじめ、委員・会員の皆様にあらためて心から御礼申しあげます。

第12回大会シンポジウム

「都市」について

小関藤一郎

本大会のシンポジウムの主題は「都市」であった。シンポジウムは第1日の午後開催された。関西における都市研究者の中心的存在ともいうべき大道安次郎、横山亮一、渡辺洋二、大橋薫の4氏による発表が行われ、相当多人数の聴衆が参加した。司会には、大道安次郎、小関藤一郎があたった。大道氏のオリエンテーションの後、横山、渡辺、大橋の各氏から、豊かな調査経験をふまえての報告がなされたが、その中で都市概念についての疑問、都市研究へのアプローチの難しさなどが披瀝された。参加者からの発言も極めて活発であったが、中でも蔵内数太氏から、都市概念に対する疑問を表明した発表者の見解に

ついて、概念を整理する方向で、論理的かつ建設的な発言があったことは、出席者に多くの感銘を与えるものであった。

第13回大会

時　昭和37年5月26日(土)・27日(日)
於　愛知学芸大学岡崎分校

《第1日　午前の部》

第1室　　司会　安西　文夫・細野　武男

1. 闘争研究における若干の問題　京都大学　新　睦人
2. T.パースンズ理論の発展　関西学院大学　倉田　和四生
3. 価値習得の諸形態　京都大学　作田　啓一
4. 社会的現実とは何か　大阪学芸大学　村田　迪雄
5. 宗教と呪術　大阪大学　森　東吾

第2室　　司会　富野　敬邦・岡村　久雄

1. 東洋的現実主義の社会的性格　関西学院高等部　志賀　大郎
2. マラヤ複合社会における労働問題と労働法　愛知学芸大学　実野　利久
3. イスラエルにおける集産的共同体（キブツ）の社会学的性格　大阪市立大学　山根　常男
4. 民族意識に関する調査研究
   (1) 民族意識の規定因素　京都大学　臼井　二尚
   (2) 民族意識ないし国家意識に関する青少年の態度　京都大学　高島　昌二

第3室　　司会　富田　嘉郎・伊藤　規矩治

1. 経営における職制と労使関係　日東電気工業KK　佐原　福礦
2. 産業集団の社会構造研究上の問題点について　大阪社会事業短期大学　中本　博通
3. 組織論と社会学　―ボウルディングの経営組織論を中心として―　大阪府立大学　渡瀬　浩
4. 日本の初期企業家の社会的性格　関西学院大学　萬成　博
   同　遠藤　惣一
5. 労働意識を育てる社会的教訓（III）　大阪市立大学　岸戸　護

《午後の部》

◇ シンポジウム　　司会　喜多野　清一・清水　盛光

「現在日本家族の動向」

報告 1. 家族の近代化　京都女子大学　藤田　義憲

報告 2. 農村家族　大阪女子大学　阪井　敏郎

報告 3. 都市家族　甲南大学　増田　光吉

報告 4. 近代化により生ずる家族問題　大阪市立大学　桑畑　勇吉

討論者

(1) 奈良女子大学　執行　嵐

(2) 名古屋大学　安藤　慶一郎

(3) 大阪女子大学　光川　晴之

(4) 愛知県立女子大学　四方　寿雄

《第 2 日》

◇ 研究発表

第 1 室　　司会　今崎　秀一・阿閉　吉男

1. 天才崇拝の一考察　大阪大学　碓井　崧

2. G. モースカの"支配階級論"について　大阪府立北野高校　居安　正

3. 機能的方法によるリーダシップ理論の展開　関西大学　吉田　民人

4. 階級構造の変動と優越的勢力の変遷過程　神戸大学　向井　利昌

第 2 室　　司会　桜井　庄太郎・豊嶋　覚城

1. 社会的機能よりみた日本浄土教成立の過程　華頂短期大学　鈴木　宗憲

2. 妻問婚における家族生活とその解体について

(1) その一　家族生活　○ 大阪女子大学　光川　晴之

(2) その二　離婚について　○ 愛知県立女子大学　四方　寿雄

京都府立大学　長谷川　昭彦

大阪学芸大学　土田　英雄

京都大学　姫岡　勤

3. 母心定型と父権定型　徳島大学　富野　敬邦

第 3 室　　司会　井森　陸平・川越　淳一

1. ある村落構造尺度の検討　—尺度分析に対する一般模型の適用—
和歌山大学　西田　春彦

2. 職場集団における第一線監督者をめぐるコミュニケーションの諸問題
—A電気工場における第一線監督者のリーダーシップに関する調査の一環として—

(1) 調査の概要　京都大学　江藤　則義

(2) 調査の対象・方法及び意義　立命館大学　野崎　治男

(3) コミュニケーションに対する作業員と監督者との関心の一致度
京都大学　岡田　至雄

(4) コミュニケーション・チャンネルとしての職場懇談会の役割
同志社大学　井垣　章二

(5) 監督者のリーダーシップとコミュニケーション
関西学院大学　遠藤　惣一

第 4 室　司会　大道　安次郎・森　正夫

1. 大阪浴場組合の運営　浪速短期大学　高津　等

2. 官僚の自殺について　大阪交通短期大学　筆谷　稔

3. 大阪市におけるスラムの成立と分布　大阪学芸大学　土田　英雄

第13回大会の思い出

林　稲苗

この大会を開くため、林、後藤を中心に本学の法経社教室の教官、助手計11名は、教室所属の約60名の学生を動員して準備に着手した。本学の事務局も第1回の打合せ会からずっと参加して、終始十分な協力をしていただいた。開会の挨拶には佐藤学長が出ていただくことも定まった。

その頃までの本学における最高水準の学術集会であると、学長は折紙をつけた。県・市および本学校友会からの援助もあり、また宿泊所も恥かしからぬものが準備できた。大会後のトヨタ自工の見学も、実は当日工場の休業日であるのを、学会のため無理にお願いした形になったが、何かと便宜を提供していただいて有難かった。

第1日午後のシンポジウムは、時間を超過しても容易に終らぬ盛会ぶり、午後の暑さも手伝って、当日夕刻の懇親会のビールの味は格別だった様子。とも

角、人の和で会が盛りあがり、来会者にも悦んでいただいたことは、何よりも嬉しかった。

第13回大会シンポジウム

「家族」について　　阪井敏郎

本大会前に4回ほど発表者が集まって、シンポジウムの進め方を検討した。喜多野清一先生がキャップで、当時、先生が阪大に勤めておられた関係で、大阪の桜橋附近の松下会館の一室を借りて月に1回ほど集った。私は世話役の仕事をしており、会合できまったことをまとめていた。さらに、発表者と質問者が集まって、どのような発表をし、どのような質問をするかの大体の打合わせもした。

私の場合は「結婚」について発表し、それに対する安藤慶一郎氏の質問に答えて、私は「日本本来の結婚形態は〝むこ入り婚〟(妻問い婚)で、それはヨバイ→タル入れといった様式と結びついており、今も辺境の地に残っている。ヨメ入り婚と結納、三々九度の形式は武家社会と共に始った」といったことを答えたように思う。その他の発表者については残念ながら今は忘れてしまった。

第14回大会

時　昭和38年5月25日(土)・26日(日)
於　大阪大学

《第1日》

第1室　　司会　豊嶋　覚城・阿閉　吉男

1. 指導者論と天才論　　大阪大学　碓井　崧
2. 闘争研究におけるジンメルの位座　　京都大学　新　睦人
3. 現代における階級抗争　—分析の一視点—　　竜谷大学　長尾　周也
4. 結合秩序の二元性について　　大阪大学　大本　晋
5. 意味連関と理念型　—その現代的評価—　　関西大学　吉田　民人

第2室　　司会　富田　嘉郎・細野　武男

1. 小売販売方式の革新傾向と消費者の販売行動　　愛知淑徳短期大学　塩田　静雄

2. 社会階層よりみた消費者行動　瑞陵高校　谷口　茂

3. (共同研究) 労働者の階級意識構造 —鉄鋼労働者の場合—

(1) 調査の目的と方法 —意識構造の分析図式—神戸大学　長谷川　善計

(2) 調査対象の特質 —労働条件、労働者構成、組織状況—

北野高校　居安　正

(3) 調査結果からみた階級意識構造の特質　神戸大学　杉之原　寿一

第3室　司会　林　稲苗・土屋　貞蔵

1. アメリカ官僚制と独占資本との癒着　大阪交通短期大学　筆谷　稔

2. 病院職員の生活時間と人間関係　大阪社会事業短期大学　中本　博通

3. シミュレーションの適用について　和歌山大学　西田　春彦

4. 世論の構造に関する一考察　京都大学　清野　正義

5. 虚構をえぐる　徳島大学　富野　敬邦

《第2日　午前の部》

第1室　司会　川越　淳二・阪井　敏郎

1. フランス農村社会学の課題 —H. マンドラを中心として—

名古屋自由学院短期大学　中田　実

2. 東北村落社会におけるパーソナリティの特性 (2)

京都大学　天鷲　良雄

3. 嫁の長期里帰り慣行について　○京都府立大学　長谷川　昭彦

大阪学芸大学　土田　英雄

京都大学　姫岡　勤

4. 都市婦人の価値志向 —日常生活の諸場面における選択的行動様式—

(1) 質問紙法による調査の結果とその分析　京都大学　森口　兼二

(2) 絵画法による調査の結果とその分析　京都大学　浜口　恵俊

第2室　司会　井森　陸平・伊藤　規矩治

1. 集合意識の問題　大阪大学　杉本　一郎

2. ロシヤ・インテリゲンチャ論　奈良学芸大学　村井　研治

3. 東南アジアにおける労働運動　名古屋工業大学　実野　利久

4. 日本的自然観の社会学的考察　関西学院高等部　志賀　大郎

5. 民族意識をめぐる若干の問題 —社会学的概念枠への試図—

大阪府立大学　岡村　久雄

第 3 室　　司会　大道　安次郎・森　正夫

1. 閥研究の試み　―O市小学校教育界の場合―

(1) 研究の意図　大阪商業大学　仲村　祥一

(2) 概況と分布　浪速短期大学　高津　等

(3) 生成と背景　大阪交通短期大学　筆谷　稔

(4) 組織と意識　北野高校　居安　正

(5) 閥と社会　大阪社会事業短期大学　小関　三平

2. 千里ニュータウンの問題　関西学院大学　大道　安次郎

《午後の部》

◇ シンポジウム　司会　今崎　秀一・雀部　猛利

「現代日本の社会病理」

報告 1. 自殺　大谷大学　中　久郎

〃 2. 非行　愛知県立女子大学　四方　寿雄

〃 3. 離婚　大阪市立大学　桑畑　勇吉

〃 4. スラム　大阪社会事業短期大学　小関　三平

討論者

(1) 京都大学　作田　啓一

(2) 大阪市立大学　大藪　寿一

(3) 神戸女学院大学　雀部　猛利

(4) 大阪商業大学　仲村　祥一

(5) 大阪社会事業短期大学　中本　博通

第14回大会の思い出

森　東吾

大阪大学は蔵内委員長在任中、数年の間、学会事務局を引き受けていたが、これまでに一度も大会の開催校になったことがなかった。それに、常任委員を勤めておられた喜多野教授が翌年3月には停年退官を迎えられることになっているので、この大会は阪大文学部所在の石橋地区のロ号館（教養部の建物）を会場にあてて開かれることになった。教室の都合もあって第1日を5月25日（土）の午後1時からとし、その代り、第2日は例年正午に終っていたのを午

後5時までとしたのも、この時の学会が先例を開くことになった。一般部会は3部会並行、シンポジウムは第2日の午後、「現代日本の社会病理」を主題として行われた。

第2日正午の委員会では、翌年京都大学を停年で退官される臼井委員長が辞任を申し出られたが、任期満了までそのまま在任していただくことになった。

喜多野教授が阪大在任最後の年とて感慨をこめて閉会の辞を述べられたが、本大会の設営にあたり、蔭で実質的な仕事を受持ってくれたのは当時の甲田助教授と大本晋助手であった。

第14回大会シンポジウム

「現代日本の社会病理」について　　雀部猛利

このシンポジウムは、次のような内容であった。まず、中久郎氏が日本の自殺を誘発する社会の構造や文化そのものの病態が問題であるという点を微視的、巨視的の両面から論ずるため、日本の自殺の統計的パターンや青少年、女性、老人などの自殺型や農村の自殺型の変化などを例証した。また四方寿雄氏は、日本の非行が社会の恒常的現象であると共に、病理逸脱現象であることを主張するため、戦後における青少年非行の行動特色を指摘した。そして、桑畑勇吉氏は、離婚が自殺や非行と同じように社会病理学の対象と見なしうるか否かについて、その社会的意味を検討するため、戦後における我が国の離婚傾向とその社会的背景を強調した。最後に小関三平氏が、スラム問題は自殺、離婚、犯罪、失業、差別などと異なり、その研究方法が多様性を帯びている現状からみて、その研究方法におけるメルクマールの求め方や共通の客観的指標の必要性を強調した。

このとき以来すでに10年の歳月が流れたが、昨年ようやく我が国の社会学会のメンバーの間に社会病理を研究する学徒の機関と組織が誕生した。思えば昭和38年に播かれたこのシンポジウムの種が10年を経てようやく発芽し、昭和49年10月21日京都婦人センターで双葉を出した感がする。今日の社会の情勢を思うとき、このシンポジウムは誠に意義あるものであったといえるだろう。

第15回大会

時　昭和39年5月16日(土)・17日(日)
於　名古屋大学

《第1日》

☆ M. ウエーバー生誕百年記念講演　臼井二尚

第1室　司会　仲村祥一・堀喜望

1. 発明の同時性について　大阪大学　碓井崧
2. 技術革新と職場集団　京都大学　清野正義
3. マレー人コミュニティにおける近代化の起点
   名古屋工業大学　実野利久
   中京女子大学　戸谷修

第2室　司会　岡村久雄・富野敬邦

1. 世帯における購買行動　㈱大広調査部　奥田和彦
2. ソ連の官僚エリート　大阪交通短期大学　筆谷稔
3. 地域開発とリーダーシップ　—事例研究—
   大阪市立大学　吉井藤重郎

第3室　司会　豊嶋覚城・川越淳二

1. 沖縄宮古島における一農村の実態調査報告　京都大学　天鷲良雄
   同　坪内良博
2. 和歌山県農家の最近の動向　和歌山大学　西田春彦
3. 町村における宗教体制の変動と宗教意識　愛知学芸大学　林稲苗

《第2日　午前の部》

第1室　司会　安西文夫・森東吾

1. リーダーシップの概念について　関西学院大学　牧正英
2. 構造・対立過程・変動　京都大学　新睦人
3. 構造 — 機能分析法の展開　関西大学　吉田民人
4. 社会理論としての場の理論　大阪経済大学　巡政民

第2室　司会　大道安次郎・土屋貞蔵

<共同研究>　志摩漁村の社会学的研究—中間報告 II —

(1) 序説 — 問題と視角 —　愛知大学　川越淳二
(2) 志摩漁村の地域構造とその特色　愛知学芸大学　松井貞雄

(3) 真珠産業の浸透と村落構造の変容 —阿児町立神—

その 1. 真珠養殖業の浸透過程　愛知大学　牧野由朗

その 2. 村落構造とその変容　京都府立大学　長谷川昭彦

(4) 沿岸漁村の構造とその変容 —志摩町御座—

その 1. 在来漁業と村落　奈良女子大学　後藤和夫

その 2. 真珠養殖の浸透と影響　日本福祉大学　吉岡進

第 3 室　司会　阪井敏郎・今崎秀一

<共同研究> 西陣機業における出機制

(1) 織元・賃機関係の構造　同志社大学　橋本真

(2) 賃機業者の労働と意識　立命館大学　野崎治男

松下電器産業　岡田至雄

(3) 賃機業者の生活構造　同志社大学　宮城宏

(4) 賃機業者の地域社会的関係　同　松本通晴

(5) 自営業者の意識　同　青井厚

《午後の部》

◇ シンポジウム　司会　井森陸平・富田嘉郎

「産業化の諸問題」

報告 1. 産業化の諸問題と産業社会学　関西学院大学　小関藤一郎

2. 産業化と経営組織　大阪府立大学　渡瀬浩

3. 産業化と労働　金沢大学　平野秀秋

4. 産業化と消費行動　名古屋工業大学　富田嘉郎

同　谷口茂

愛知淑徳短期大学　塩田静雄

討論者　京都大学　江藤則義

関西学院大学　萬成博

立命館大学　野崎治男

関西学院大学　遠藤惣一

名古屋市立大学　加藤昭二

第15回大会の思い出

阿閉吉男

本大会は、昭和39年5月16日（土）、17日（日）の両日にわたって当番校、名古屋大学において開催された。大会の当番校となる話は前々からあったが、名古屋大学の文科系諸学部は名古屋城内の旧第6連隊の兵舎を使用していたので、手ぜまである上に何事につけて不便で、当番校となるにはふさわしくなかった。昭和37年に東山キャンパスに文科系諸学部が移転し、それを機会にようやく当番校となることができた。当番校側の人びとはいわゆる裏方のようなもので、個々の部会に出席できなかったのは残念である。しかし、印象深かったのは大会初日の臼井二尚教授による「M．ウエーバー生誕百年記念講演」で、この大会にとってきわめて有意義であったとおもわれる。

何分にもわたしどもは不馴れのため、会員の方々にご迷惑をかけたこととおもう。終わりに、大会運営上、名古屋大学の同僚諸氏に種々ご配慮を賜わったことに対し、この機会に感謝の意を表わしたい。

第15回大会シンポジウム

「産業化の諸問題」について

富田嘉郎

このシンポジウムの司会は、井森陸平氏と私である。そのうち私の担当した「産業化と消費行動」は、谷口茂氏と塩田静雄氏が発表された。それは、名古屋市内の2つの団地と、そこにあるスーパーを調査対象として、団地住民がスーパーをどのように考え、その消費・購買行動のなかでスーパーがどのように位置づけられているか、実証的な調査結果を述べたものである。

当時、都市社会学のほうで団地そのものの調査は行なわれていたが、団地住民の消費行動についての調査はまだ手がつけられていず、スーパーについての調査などは全くみあたらなかった。

このようなさいに、住宅団地とスーパーマーケットを結びつけて上述のような調査結果が発表されたことは新しい境地を開拓したユニークなものであったと考える。

第 16 回 大 会

時　昭和40年5月22日(土)・23日(日)
於　大阪府立大学

《第 1 日》

第 1 室　　司会　細野　武男・仲村　祥一

1. 社会学における「説明」について　大阪大学　丸木　恵祐
2. <貢献>と<享受>の概念　—その発展的意義をさぐる—　京都大学　中野　秀一郎
3. 社会学の社会学への序説　—アメリカ社会学批判をめぐって—　関西学院大学　宇賀　博
4. 「社会構造」の概念　神戸女学院大学　小関　三平
5. 社会連帯の諸次元　大谷大学　中　久郎

第 2 室　　司会　富田　嘉郎・伊藤　規矩治

1. 職場管理機構の合理化と職長制度　京都大学　清野　正義
2. 定年制に関する意識調査　関西学院大学　牧　正英
3. 経営者研究の動向　—アプローチの問題について—　同　萬成　博
4. 資本主義の「精神」と企業家精神　名城大学　梶谷　素久
5. 現代資本主義論と産業社会論　—ストレイチーとドラッカーを中心に—　大阪経済大学　巡　政民

第 3 室　　司会　川越　淳二・土屋　貞蔵

1. 農業構造改善と近代的村落団体　京都大学　平田　順治
2. 鹿児島県指宿地方における「家」相続について　帝国女子大学　中川　喜代子
3. 日本の成人に見られる行為志向の基本構造　—京都府下地域の調査から—　京都大学　浜口　恵俊
4. 家事調停委員の価値意識について　愛知県立女子大学　四方　寿雄

第 4 室　　司会　富野　敬邦・堀　喜望

1. マレーシアにおける稲作農村の社会構造　竜谷大学　口羽　益生　京都大学　坪内　良博　同　前田　成文
2. ナショナリズムと農民の問題

—ベトナム民族解放運動の基礎をなすもの—

華頂短期大学　鈴木　宗憲

3. 文学に現われたロシア・インテリゲンチャの型

奈良学芸大学　村井　研治

4. 日本文化の社会学的一考察

—日本的思考の根底にあるものについて—

関西学院高等部　志賀　大郎

☆特別講演

司会　大道　安次郎・森　東吾

1. 産業社会における社会問題　武田　良三

2. 階級の基礎理論　高田　保馬

《第 2 日》

第 1 室　司会　今崎　秀一・阿閉　吉男

1. H. スペンサーの認識論的立場　昭和高等学校　山田　隆夫

2. 革新官僚の行動について　大阪交通大学　筆谷　稔

3. 官僚制と代議制　—その組織論的考察—　大阪大学　吉田　民人

4. 階級抗争に関する一考察　神戸大学　向井　利昌

5. 親和・闘争関係の諸要因　大阪女子大学　阪井　敏郎

第 2 室　司会　豊島　覚城・森　正夫

1. 世帯における購買行動 II　㈱大広　奥田　和彦

2. 真珠養殖業における企業体の性格　—志摩郡大王町船越—

愛知大学　中田　実

奈良女子大学　後藤　和夫

3. 判別分析の適用　和歌山大学　西田　春彦

4. 「大衆社会」理論の理論的側面の検討

—マンハイム＝ミルズの「大衆社会」論を中心にして—

大阪市立大学　長尾　演雄

第 3 室　司会　林　稲苗・安西　文夫

1. カー・ラジオ聴取の実態　—京都市における調査から—

京都大学　丸山　定巳

同　井上　俊

同　石川　実

2. 郊外における住民組織とその変容過程　関西学院大学　大道　安次郎
同　倉田　和四生
3. Skid Row の比較研究　大阪学芸大学　土田　英雄
4. 道徳の病態について　大阪学芸大学　村田　迪雄

第 4 室　司会　井森　陸平・阪井　敏郎

1. 団地計画に関する社会学的並びに建築学的研究　—最終報告—
大阪市立大学　大藪　寿一
2. 団地と周辺地域社会　甲南大学　増田　光吉
3. 団地族の宗教的態度　竜谷大学　川崎　恵璋
4. 団地児童の態度および適応性について　大阪府立大学　松原　慶太郎
5. 地域社会より見た団地社会の衝撃　関西学院大学　大道　安次郎
神戸女学院大学　西山　美瑳子
関西学院大学　倉田　和四生

第16回大会の思い出

岡村久雄

第16回大会は、城南、大和川を距て東に金剛、葛城の山系をのぞみ、西に仁徳帝陵をひかえる大阪府立大学において、5月22・23の両日、多数会員の参会をえて盛大に開催された。この大会で特に想起されるのは、「産業社会における社会問題」と題する武田良三、及び「階級の基礎理論」をテーマとする高田保馬両先生の特別講演である。とりわけ高田先生のそれは、おそらく社会学会という公式の場での先生の最後のものであったと思われる。在天の御霊に陳謝しつつ卒直に申述べれば、上記のテーマをかなり離れて、当時絶頂期にあったアメリカの対ベトナム戦争を声を震わせつつ激しく批判されたことが、なお昨日のことのように想起される。また、本大会を機として、歴年学会の発展に尽瘁された臼井二尚教授が委員長を退ぞかれ、あらたに井森陸平教授が就任されることとなったことも、顧みて本学会の歩みをしるす一事実として思い出に浮ぶ。

第16回大会特別講演について

森　東吾

本大会ではシンポジウムの企画がなく、いわばそれに代わるものとして、特別講演が行われた。その講演会は当時、日本社会学会会長の武田良三氏と本学会顧問の高田保馬氏を講師にお願いし、大道安次郎氏と私（森東吾）が司会を勤めた。

武田氏は「産業社会における社会問題」と題し、ようやく産業社会の離陸の状態から成熟期に達しようとしているわが国の現状に鑑み、そこにおける農村や都市の問題、人口問題、大衆社会の問題、社会福祉の問題等々、産業社会にまつわる矛盾や乖離を社会問題として分析し、これらの問題に対して謙虚に、しかも執拗な態度をもって肉迫することが社会学者の責務であることを強調され、続く高田博士の話は「階級の基礎理論」という演題を変更、学術講演を離れて時局に関する所感を述べられ、強大国アメリカの弱小国南ベトナムに対する爆撃行に関して悲憤慷慨される熱弁となった。おそらく、これが高田博士の生涯における最後の公開講演となったものかと思われる。聴衆は学会会員が大多数で二百数十名であったが、老学者の時局を憂える心情に心を打たれる人が多かったようである。

第 17 回 大 会

時　昭和41年5月21日(土)・22日(日)
於　立命館大学

《第 1 日》

第 1 室　　司会　阿閉吉男・堀　喜望

1. 社会学的ロマン主義について　—アメリカ社会学研究の一節—
神戸学院大学　宇賀　博

2. 組織化の問題　—大衆化現象の克服をめぐって—
大阪市立大学　長尾演雄

3. Lèvi - Strauss における≪交換≫について
大阪大学　杉本一郎

4. 精神の形成と言語　大阪学芸大学　村田迪雄

第 2 室　　司会　土屋　貞蔵・豊嶋　覚城

1. ショップ・スチュアード運動と職場組織の変容について
関西学院大学　清野　正義

2. 神戸市における中企業（ゴム産業）の調査報告 (1)
—職長の人間関係—　神戸女学院大学　西山　美瑳子

3. 神戸市における中企業（ゴム産業）の調査報告 (2)
— 一般従業員の組織合理化への態度 —　関西学院大学　遠藤　惣一

4. あるマーケティング・モデルについて　和歌山大学　西田　春彦

第 3 室　　司会　川越　淳二・後藤　和夫

1. マラヤの農村における離婚　京都大学　坪内　良博

2. 農業構造改善事業の影響とその問題点
—石川県下の事例調査報告—　金沢大学　森　正夫

3. 中央先進地帯に於ける村落支配者層の交替と変容
愛知女子大学　戸谷　修

4. 東北水田単作地帯における農村の社会構造　京都大学　池田　義祐
大谷大学　小笠原　真
京都大学　平田　順治

☆ 特別講演

司会　今崎　秀一・安西　文夫

1. 教育の社会的文化的目標　牧野　巽

2. 理勢乗除　蔵内　数太

《第 2 日》

第 1 室　　司会　細野　武男・橋本　真

—重点部会—

1. 社会運動と社会変動　関西学院大学　塩原　勉

2. 日本における工業化と職業移動（1880～1960）
—職業構造の長期および短期的変化—　関西学院大学　萬成　博

3. 社会変動について　大阪経済大学　巡　政民

4. 最近の社会変動論をめぐって　立命館大学　中野　清一

第 2 室　　司会　林　稲苗・岡村　久雄

1. 現代の婚姻習俗について　—奈良県下の実態調査から—
奈良商工高等学校　野口　晴吾

2. 現代日本のキリスト教　—信徒の職業分析をとおして—
神戸学院大学　宇賀　博
大阪女学院　関根　秀和

3. 日本における自然と社会　—東洋的無の社会学—
関西学院高等部　志賀　大郎

4. 日本人の感動点　—映画「香華」の分析から—
竜谷大学　浜口　恵俊
京都大学　高橋　三郎
同　井上　俊

第3室　司会　雀部　猛利・四方　寿雄

1. 都市部落の人口と家族　帝国女子大学　中川　喜代子
2. 都市部落の諸問題　大阪市立大学　山本　登
3. 家族解体の基本問題　京都府立大学　園　直樹
4. 児童保護収容施設における養護　—集団体制と養護過程—
日本福祉大学　吉岡　進

第17回大会の思い出

野久尾　徳美

前の年に設置されて、いまだ教員組織も十分整わないわれわれの学部が、41年の第17回大会をお引き受けしたのは、何とも荷が重すぎてかえって色々と御迷惑をおかけした想いが残っています。

牧野巽・蔵内数太両先生の特別講演をはさんで、数々の研究発表がなされましたが、高度成長期を反映した社会変動への社会学的関心が高まりが注目すべき特色であったと思われます。

その後、大会を催した恒心館学舎は学園紛争で封鎖、破壊され、われわれは衣笠の新学舎へ移りましたが、昨年（49年）ここで日本社会学会大会を迎えうるようになったことを思うと、まことに感慨に耐えません。

第17回大会特別講演について

今崎　秀一

本大会は、前回大会と同じように、シンポジウムの代りに、2つの特別講演

があった。そのうち、牧野巽教授の講演については、当時のメモが見当らないが、「教育の社会的、文化的目標」と題して、教育社会学の立場から話され、参会者に深い感銘を与えるものであった。次に蔵内教授の講演は、初めに西欧の社会学者の日本の学者に対する期待に触れ、事象の考察における東西に共通な枠を問題とした。それは法則と運命、規範と潮流である。前者は必然と偶然の対照に関係するが、偶然は定存的には運命となる。後者は構造と生起、または形象的なものと流動的なものとの対照である。東洋の古典の言葉でいえば理と命、法と勢である。この2組の平易な対概念はたとえば全体社会の構成についても、意志決定の次元についても適用できる。理と勢を対概念とした場合は吾々に特になじみが多いが、それについて「乗除」がいわれている。乗除は諸因子間の動的関係を意味し、やがて相補、相互内在化、矛盾の理論に展開することとなる。「理勢乗除」と題された所以である。

第18回大会

時　昭和42年5月20日(土)・21日(日)
於　大阪市立大学

《第1日》

第1室　—理論—　　司会　森　東吾・細野　武男

1. マッツア (David Matza) におけるドリフト (Drift) の概念について
　立命館大学　仲村　祥一
2. 行為のトライアド・モデル　京都大学　柴野　昌山
3. パーソンズ社会学成立の思想史的意味　神戸学院大学　宇賀　博
4. イギリス功利主義思想と H. Spencer の「社会静学」
　昭和高等学校　山田　隆夫
5. タマスの「4つの願望理論」をめぐって　関西学院大学　国歳　真臣

第2室　—家族・都市・産業—　司会　林　稲苗・阪井　敏郎

1. 核家族孤立化論に関する一考察　大阪市立大学　野々山　久也
2. 隠居制家族の変容過程　—志摩国府の場合—
　大阪学芸大学　土田　英雄
　明治大学　長谷川　昭彦
3. 新しい都市理論への試み　関西学院大学　大道　安次郎

4. フランスにおける Bureaucratie について　同　小関　藤一郎

第 3 室　—社会意識—　司会　森　正夫・豊嶋　覚城

1. 宗教意識の問題点　—奈良県下の実態調査から—
奈良商業高校　野口　晴吾

2. 日本人の宗教への親近感　—階層と宗教—　神戸学院大学　宇賀　博
大阪女学院　関根　秀和

3. 今日の青少年に見られる国家意識
歴史感覚について　—高校生と日本人—　関西学院高等部　志賀　大郎

4. 近代日本における市民社会と≪共同態≫　京都大学　堀口　牧子

◇ シンポジウム「集団論」
司会　安西　文夫・江藤　則義

発表者

1. 社会体制と社会集団　名古屋大学　田中　清助

2. 集団論における主体モデル・変動モデル・実践モデル
大阪大学　吉田　民人

3. 態度変容・思想改造における集団技法について
神戸女学院大学　西山　美瑳子

討論者

江藤　則義（京都大学）　渡瀬　浩（大阪府立大学）
作田　啓一（京都大学）

☆ 重点部会「伝統産業」
司会　大道　安次郎・川越　淳二

1. 西陣機業の出機制における伝統性・近代性　同志社大学　橋本　真

2. 西陣機業者の生活と労働における伝統性・近代性
同　宮城　宏

3. 丹波酒造出稼者の現況　甲南大学　井森陸平・小西恒子・大西正曹

4. 酒造りの労働の組織　関西学院大学　萬成　博・牧　正英・清野正義

5. 技術革新による塩業の生産機構の変容　神戸大学　杉之原　寿一

6. 技術革新による塩業の労働組織の変容　同　長谷川　善計

《第 2 日》

第 1 室　—理論—　司会　阿閉　吉男・池田　義祐

1. 社会規範類型論寸考　大阪府立大学　新　睦人

2. アノミー論の意義と限界　京都大学　佐々木　嬉代三
3. 逸脱行動理論の検討　同　大村　英昭
4. 大衆社会論における中間集団　同　石川　実
5. 情報処理システムとしての社会
— Durkheim 社会観の現代的評価 —　大阪大学　吉田　民人

第 2 室 —方法・民俗・文化— 司会　堀　喜望・岡村　久雄

1. 媒体計画と線型計画法（続）　和歌山大学　西田　春彦
2. 流行のにない手分析　㈱電通大阪支社　巽　健一
3. 墓とその伝承　—墓を社会学的にどうとり上げるか—
近畿大学　後藤　文利
4. 東アフリカ・イラク族の社会における長老の意味
甲南大学　米山　俊直

第18回大会の思い出

上子武次

この大会について川越淳二氏が社会学評論18巻3号に報告を寄せておられる。それによると報告31、報告者37、参加人員も200名に達した。この大会のメーン・イベントであるシンポジウム「集団論」と、重点部会「伝統産業」についても、詳細な紹介と適切な評価が同報告においてなされている。

それによれば、シンポジウムでは集団プロパーの分析、個人に対する集団の影響、集団と全体社会の関係をめぐる3つの報告がなされ、重点部会では西陣機業、酒醸造、塩業という関西特有の伝統産業に関する3つの報告が行われ、すべて個性的ですぐれた内容のものであったが、各報告の間の統合、噛み合せが必ずしも十分とはいえなかったようである。

大会開催校のメンバーとしての裏方仕事の間にかいまみたことから受けた印象としては、委員会の方々が十分な数の発表者を得るのに苦心されていたこと、シンポジウムの企画がなかなかスムーズに進行しなかったように見受けられたことが思い出される。

第18回大会シンポジウム

「集団論」について　　江藤則義

ここでは、その発表にいたるまでの経過を中心にしその思い出を書いてみたい。42年の上旬であったか、その当時の常任委員の1人であった池田教授からシンポジウムのアレンヂの依嘱をうけた。その節、西山美瑳子氏だけは、委員会から指示されてきたと記憶している。早速、作田教授と相談し、そのサブテーマと人選にとりかかった。集団論を中心とし、一方、社会体制と集団の連関、他方、集団と個人の連関の3つのサブテーマを決定して、集団論には、渡瀬浩氏か吉田民人氏をあてること、集団と個人との連関は西山氏に決定。社会体制と集団の連関は、誰にするか未定であったが、最後に田中清助氏に決定したわけである。早速3回打合せ会を開いた。その節田中氏の Association の概念が理解できず、大会当日の午前の打合せ会でやっと理解できたことを思いおこす。

第19回大会

時　昭和43年5月25日(土)・26日(日)
於　竜谷大学

《第1日》

第1室　—理論—　　司会　阿閉吉男・森　正夫

1. ダーレンドルフ社会理論における折衷性について
　　大阪大学　橋本和幸
2. 社会連帯論と社会主義　—デュルケム理論の問題—
　　京都大学　中　久郎
3. 社会学における主体性の諸問題　　大阪大学　吉田民人
4. フランス社会学における階級研究　　関西学院大学　小関藤一郎

第2室　—宗教—　　司会　林　稲苗・豊嶋覚城

1. 創価学会員の社会的基盤　　竜谷大学　志水宏行
2. アメリカにおける仏教会メンバーの
　Voluntary Association への参加についての一考察
　　竜谷大学　中垣昌美
3. 戦争と宗教　　金沢経済大学　鈴木宗憲

4. 信仰と愛他的パーソナリティの形成

(主として P. A. Sorokin による)　和歌山大学　今崎　秀一

第 3 室　—地域と文化—　司会　岡村　久雄・堀　喜望

1. 低開発地域における経済発展の社会学的アプローチ

京都大学　中野　正大

2. 西アフリカの農村社会（東アフリカとの比較）甲南大学　米山　俊直

3. 日本人の現実主義の根底にあるもの　—柳田民俗学に関連して—

関西学院高等部　志賀　大郎

4. 潜在構造分析の解について　大阪大学　西田　春彦

5.　神戸女学院大学　雀部　猛利

◇ シンポジウム「都市社会学とスラム」

司会　大道　安次郎・仲村　祥一

報　告

1. スラム研究の系譜　桃山学院大学　飯塚　進

2. スラム研究の問題点　関西学院大学　倉田　和四生

3. 「社会問題」としてのスラム　同志社大学　小倉　襄二

討論者

1. 真田　是（立命館大学）

2. 大藪　寿一（大阪市立大学）

3. 斎藤　恕（あいりん会館）

《第 2 日》

第 1 室　—理論—　司会　池田　義祐・橋本　真

1. 無階級社会から階級社会への移行の諸問題

—所有論を中心にアジア的生産様式論に及ぶ—京都大学　岩崎　信彦

2. マージナル・マン理論　関西学院大学　国歳　真臣

3.　昭和高等学校　山田　隆夫

4. Participant functionalism と Ex ante functionalism

大阪大学　吉田　民人

5. ダーレンドルフの機能主義批判　大阪市立大学　安西　文夫

第 2 室　—家族・農村—　司会　川越　淳二・土屋　貞蔵

1. 職業別・階層別に見た親子関係の研究　大阪女子大学　光川　晴之

2. 農村家族の親子関係　—京都府下農村の中学生の親に対する調査から—

明治大学　長谷川　昭　彦

3. 高校生の性意識と家庭の背景との関連について

愛知県立大学　四　方　寿　雄

徳　岡　秀　雄

4. 丹波杜氏と但馬杜氏の現況　甲南大学　米　山　俊　直

仏教大学　大　西　正　曹

5. 最近の農民層分解と出稼ぎの問題について

関西学院大学　清　野　正　義

第19回大会の思い出

川　崎　恵　璋

本大会は二百数十名に達する多数の参会者をえて開催され、自由報告22件（理論9件、宗教4件、地域と文化4件、家族・農村5件）とシンポジウム「都市社会学とスラム」の発表・討論が行われた。これらの発表については、社会学評論75号に杉之原寿一氏の指摘があるのでここでは割愛する。ただ残念に思っていることは、折角の竜谷大学での大会開催なので、宗教に関する重点部会を組織したかったが、会場周辺で建築工事が行われていたため、会場設営に思わぬ苦労をさせられて実現できなかったことである。また、大会会場が何分にも建設途上で十分なものでなかったことは深く会員諸氏にお詫びしたいが、大会運営に大学がかなりの援助をしてくれたので、部会進行のシグナル・ボートの使用や、スティションホテルでの懇親会、あるいは本願寺参観の計画などは多少とも本大会の思い出になっているのではないかと思う。

第19回大会シンポジウム

「都市社会学とスラム」について

仲　村　祥　一

シンポジウムの構成と司会に加わった1人として、**ねらい**だけをつぎに記してみたいと思います。

社会学者による関西地区スラムの調査研究は釜ケ崎（現愛隣地区）を中心に

かなり積み重ねられてきていたが、本大会では他の学問分野からのアプローチをもまじえながら、研究方法の再吟味をしてみよう、ということで用意された、と記憶している。

飯塚進氏には、社会学にとどまらないスラム研究の諸系譜を概観してもらい、倉田和四生氏には、機能主義の観点からの概念枠組の提示を、そして小倉襄二氏には、社会福祉学からの発言を、京都での実態調査をもふまえて、お願いした。

討論者も報告にあわせ、社会学から大藪寿一氏、マルクス主義的（福祉論的）立場から真田是氏に問題提起をお願いしたが、研究と実践との関連も考え、釜ケ崎の愛隣館長斎藤恕氏に現場からの声を加えて頂いた。議論は必ずしも噛みあったとはいえないが、それなりの論点整理はできたか、と憶えている。

第20回大会

時　昭和44年5月24日(土)・25日(日)
於　桃山学院大学

《第1日》

☆特別講演

関西社会学会の回顧　臼井二尚

◇シンポジウム「社会学と隣接科学—(地理学・人類学)」

司会　今崎秀一・堀喜望

(1) 社会学と地理学	発表者	桃山学院大学	小寺廉吉
		大阪教育大学	松田信
	討論者	大阪市立大学	渡辺久雄
		同	岩田慶治
(2) 社会学と人類学	発表者	京都府立大学	水野浩一
		甲南大学	米山俊直
	討論者	関西学院大学	光吉利之
		大阪市立大学	上子武次

☆テーマ部会

—日本の近代化と宗教—　司会　阿閉吉男・豊嶋覚城

(1) 日本の近代化についての一考察
—特に日本の近代化と宗教意識の関係を中心として—
大谷大学　小笠原　真

(2) 創価学会急伸の組織論的考察
—日本的大衆組織の組織原理と動態—　大阪府立大学　岡本　幸治

(3) マックス・ウェーバーにおけるアジア宗教分析の基本的枠組
—日本の近代化をめぐって—　和歌山大学　池田　昭

(4) ナショナリズムと宗教の役割　—ベトナム南部における新宗教—
金沢経済大学　鈴木　宗憲

(5) 祖先崇拝の意識　岐阜女子大学　林　稲苗

《第 2 日》

第 1 室　—理論・方法—　司会　安西　文夫・橋本　真

(1) イデオロギー分析の基本的視角　大阪府立大学　宝月　誠

(2) 社会有機体説と経済的社会構成体説　—スペンサーとマルクス—
昭和高校　山田　隆夫

(3) 社会変動の総合理論の試み　—唯物史観の諸問題—
大阪大学　吉田　民人

(4) 型の計算について　大阪大学　西田　春彦

第 2 室　—文化・社会病理—　司会　岡村　久雄・阪井　敏郎

(1) 行為志向パターンの日米比較　—調査報告—　竜谷大学　浜口　恵俊

(2) 西独における大学生の社会的位置づけ　同志社大学　伊藤　規矩治

(3) 社会病理学の現代的課題　—社会疫学の試み—
京都府立大学　園　直樹

(4) アメリカにおける離婚の実態について　愛知県立大学　四方　寿雄

第 3 室　—都市・産業—　司会　大道　安次郎・川越　淳二

(1) 宮座と社会変動　—ベッドタウン化進行地域の場合—
奈良商業高校　野口　晴吾

(2) フランス労働組合の新しい動きについて　関西学院大学　小関　藤一郎

(3) 大阪都市圏における階層構成と生活意識　大阪市立大学　山本　登
帝国女子大学　中川　喜代子
大阪市立大学　青木　秀男

大阪市立大学　牛草　英晴
同　森　本男
同　山本　順二

第20回大会の思い出

今崎秀一

本大会は、昭和41年度に社会学部が設置された桃山学院大学の昭和町学舎において行われた。20周年を記念して、特別プログラムが組まれ、臼井二尚教授の特別講演「関西社会学会の回顧」、シンポジウム「社会学と隣接科学」、テーマ部会「日本の近代化と宗教」があった。

特別講演においては、本学会の草創期の状況を中心に述べられたが、現在会員数380名を数えるまでに発展してきていることと思い合せて、今昔の感に耐えないものがある。

シンポジウムでは、社会学とその隣接科学の関係が取上げられ、ややもすると専門の狭い視野にとらわれがちの傾向を反省するのに大いに役立ったし、また「日本の近代化と宗教」と題するテーマ部会も、きわめて今日的意義のある問題を扱い、参会者たちの関心を大いにそそった。

なお、当時の大学一般の雰囲気、学生一般の気持ちなどを考慮して、恒例の会員懇親会はこれを中止することとした。

第20回大会シンポジウム

「社会学と隣接科学」について

堀　喜望

今回のシンポジウムでは、「隣接科学」として人文地理学と文化人類学に限定し、前者にあっては小寺廉吉、松田信、後者では水野浩一、米山俊直の諸氏が報告を担当し、それぞれ平行的に企画、司会を今崎と堀とが分担することになった。このように独立に準備されたため、社会学を中心として両者を関連づける交流の検討が不充分であったが、討論者に渡辺久雄、岩田慶治の両氏を学会外から迎え、会員の上子武次、光吉利之両氏を加えて、村落を中心とした地域共同体と家族の社会構造をめぐって意欲的な討論が行われて、多様な問題の

所在が示唆された。

小寺氏はデュルケームとF．ラッツェルの古典的な論争を中心とし、松田氏はもっぱら最近のフランス地理学の動向にふれて、何れも理論的な接近をこころみた。他方、水野氏は東北タイの農村調査に基づき、双系家族の周期的変動のモデル化を提起し、また米山氏は西アフリカ・バンバラ族の調査を報告資料として、共同体における「文化変動の微視的考察」に関してその文化的諸要因の解明を示した。

この大会は、学園封鎖などの困難な期間に準備されたため、報告に見られる意欲的な問題提起にもかかわらず、充分な討論の結集に至らず、また各分野の研究の共同にまで発展させえなかったことは、遺憾の残るところである。

第21回大会

時　昭和45年5月23日(土)・24日(日)
於　愛知県立大学

《第1日》

第1室　—理論I—　　司会　安西　文夫・堀　喜望

(1) 機能主義の再検討　京都大学　中野　正大

(2) 社会的行動主義と社会学的機能主義　大阪大学　吉田　民人

(3) 「Homo Sociologicus」について　和歌山大学　橋本　和幸

(4) 情報史観について　—生得・習慣情報の自然選択・主体選択—
大阪大学　吉田　民人

(5) 潜在構造分析の若干の動向について　大阪大学　西田　春彦

第2室　—産業・都市—　　司会　川越　淳二・仲村　祥一

(1) 戦後アメリカにおける農業の展開と Urbanization 論
—方法論批判—　大阪市立大学　青木　秀男

(2) 地方小住民の生活と意識　—和歌山県橋本市の場合—
高野山大学　沢田　軍治郎

(3) ウェーバーの経営概念の有効性と限界性　京都大学　八木　秀夫

(4) 終身雇用制の構造・機能分析　関西学院大学　萬成　博
ブラウン大学　Robert M. Marsh

◇ シンポジウム「都市化と社会問題」
司会　大道　安次郎・四方　寿雄

(1) 基礎理論　発表者　金城学院大学　高橋　純平
　　討論者　椙山学園大学　安藤　慶一郎
(2) 家族　発表者　徳島大学　金屋　平三
　　討論者　大阪女子大学　光川　晴之
(3) 地域　発表者　大阪市立大学　大藪　寿一
　　討論者　名城大学　吉岡　進
(4) 政治　発表者　名古屋市役所　榎本　立二
　　金城学院大学　丸木　恵祐
　　討論者　同志社大学　間場　寿一

《第 2 日》

第 1 室　—理論Ⅱ—　司会　池田　義祐・森　東吾

(1) ウェーバー社会科学方法論における合理的行為の理論
　　京都大学　鈴木　正仁
(2) マックスウェーバーの合理性の意味
　　—最近の諸説をめぐって—　和歌山大学　池田　昭
(3) M. ウェーバーの「近代技術」の概念について
　　桃山学院大学　倉橋　重史
(4) 階級について　—ダーレンドルフ批判を中心に—
　　関西学院大学　稲継　尚

第 2 室　—社会問題・民族—　司会　岡村　久雄・阪井　敏郎

(1) アノミー論への一視角　—試論的考察—　京都大学　田口　宏昭
(2) 台湾高砂族に関する一考察　京都産業大学　天鷲　良雄
(3) 愛知県の高等学校における
　　卒業式、君が代、日の丸をめぐる諸問題と政治について
　　瀬戸高校　山田　隆夫
(4) 家族関係からみた人工授精児について　愛知県立大学　四方　寿雄

第21回大会の思い出

四方　寿雄

本大会は、1970年5月、愛知県立大学において開催された。この年は、大学紛争の余燼がいまだ消えず、各地で、学会の開催が学生たちによって妨害され

ていた時期でもあった。そのため、関西社会学会の委員をはじめ、開催校の責任者たちは、はたして学会の開催が可能であるか懸念し、心労することが多かった。開催校の立場としては、学会開催を引受けた以上、万難を排して開催を実現、成功させる決意をかため、学生自治会に協力を要請したりした。学会当日は、幸いにも晴天に恵まれ、学生の妨害もおこらず、無事、学会を終了することができたことを何よりも喜んだ次第である。とくに私にとって印象に残ることは、開会の辞を、以前、私が金沢大学に勤務していた時代にお世話になった井森陸平教授(当時甲南大学教授)が行われ、歓迎の辞を私と同姓の、四方博愛知県立大学学長が述べて下さったことである。

以上のような状況の下での学会の開催にあたり、いろいろ御世話下さった、学会事務局の諸先生、並びに本学の横山亮一教授、高津等助教授らの御協力に心から感謝している次第である。

第21回大会シンポジウム

「都市化と社会問題」について　　四　方　寿　雄

本大会のシンポジウムは、本学の特色を考慮していただいて上記のテーマがとりあげられ、大道安次郎教授と四方寿雄教授が共同司会することになった。発表者は、都市化の基礎理論を高橋純平教授が、L．ワースの都市化理論の再検討という趣旨で自説を展開された。次に、都市化が家族に与える影響について金屋平三教授が報告され、つづいて、都市地域の病理問題について、大藪寿一教授が明快に自説を展開された。最後に、都市の政治について、名古屋市役所の榎本立二氏が、都市住民の政治への参加、投票行動の組織性などについて、具体的な資料を提示しながら実務家らしく適確に報告され、聴衆に大いなる感銘を与えた。都市化と社会問題といったような、概念規定のあり方によっては、議論の余地のある問題を、各発表者が、問題の核心にふれながら、巧みに発表されたことによって、議論は活発になりかけたが、時間の制約上、結論をみないまま、討議を打切らざるをえなかったことは遺憾であった。いつの日か、再びこのテーマについて、学会で再検討されんことを願っている。

第 22 回 大 会

時　昭和46年6月5日(土)・6日(日)
於　関　西　大　学

《第 1 日》

第 1 室　—理論—　　司会　青　井　　厚・安　西　文　夫

(1) 疎外労働と社会学　瀬戸高校　山　田　隆　夫

(2) マスローグの成立とその社会史的考察　名古屋学院大学　後　藤　宏　行

(3) ホーマンズ研究の一視角
—イギリス中世村落系の社会行動分析と交換理論—
東北大学　小　坂　勝　昭

(4) 信念倫理と責任倫理のアンチノミーを超えて
—マックスウェーバーの思想的原点—　京都大学　鈴　木　正　仁

第 2 室　—組織・労働—　　司会　岡　村　久　雄・大　道　安次郎

(1) 官庁の組織研究　—地方官庁における実証研究—
関西学院大学　牧　正　英
同　遠　藤　惣　一

(2) 我が国の職業分類にみられる職業思想の発展　同　松　井　茂　樹

(3) 現代工場における合理化の機能と逆機能　同　萬　成　博
ブラウン大学　Robert M. Marsh

(4) 「脱工業社会」の理論と「新しい労働者階級」の概念について
立命館大学　清　野　正　義

第 3 室　—地域・家族・教育—　司会　阪　井　敏　郎・四　方　寿　雄

(1) 近畿圏の主成分分析　大阪大学　西　田　春　彦
D産業デザイン研究所　杉　本　美　津
大阪大学　山　本　剛　郎

(2) 教養課程に対する態度　—新制大学卒業教官の場合—
京都大学　木　下　富　雄
同　作　田　啓　一

(3) 未解放部落の社会関係　—分散地区の追跡調査より—
名城大学　吉　岡　進

(4) ソ連における女性の地位について　奈良教育大学　村　井　研　治

(5) ソヴエト家族の機能　高野山大学　沢　田　軍治郎

◇ シンポジウム「ウェーバー社会学の方法と問題」
司会　阿閉吉男・池田義祐・森　東吾

(1) マックス・ウェーバーの行為理論と社会学的機能主義

金沢大学　佐藤　嘉一

(2) マックス・ウェーバーの支配団体論　—ナチ党分析への適用—

金城学院大学　碓井　崧

(3) 宗教の合理性　和歌山大学　池田　昭

(4) ウェーバーの「儒教と道教」をめぐって

追手門学院大学　木全　徳雄

討論者　奈良女子大学　新　睦人

神戸大学　居安　正

大阪大学　徳永　恂

《第 2 日》

☆重点部会

第 1 室「近郊村の最近の変貌　—大阪府千早赤坂村—」

司会　臼井　二尚・川越　淳二

(1) 調査地の概観　関西大学　臼井　二尚

(2) 封鎖性・開放性　同　西山　美瑳子

同　中道　実

(3) 生活の共同と分離　京都工業繊維大学　豊嶋　覚城

(4) 等質性・異質性　京都府立大学　益田　庄三

(5) 伝統性・変動性の面から　広島大学　八木　佐市

(6) 即自性・対自性　大谷大学　小笠原　真

(7) 把捉了解の具体的個別性　関西大学　臼井　二尚

(8) 調和性・不調和性　大阪女子大学　阪井　敏郎

第 2 室「フランス社会学」　司会　小関　藤一郎・鈴木　宗憲

(1) 連帯の社会理論　—アノミー論の社会観—　京都大学　中　久郎

(2) フランス社会学派の方法論について　— M. Mauss を中心して—

追手門学院大学　杉本　一郎

(3) フランス知識社会学の特質　神戸大学　大野　道邦

(4) 現代フランスにおける家族研究

—ションバールド・ロウを中心として—　竜谷大学　坪内　玲子

(5) フランス社会学とフランス社会　関西学院大学　小関　藤一郎

第22回大会の思い出

橋本　真

本大会は、昭和46年6月5日（土）、6日（日）に、関西大学社会学部学舎で行われた。前年6月に関大客員教授臼井二尚顧問より関大で引き受けるようお話があり、本学としては快くお引き受けすることになった。それは本学が昭和42年に社会学部を創設し、あたかもこの年は学部完成年度に当たり、引き続き大学院設置の計画もあり、研究・教育の創造的発展を期さなければならない時期にあったからでもある。ただ異例のこととして特記しておきたいのは、例年より2週間ほど繰り下げて開催させていただくようお願いして委員会の諒承を得たことである。というのは6月5日は本学では大学昇格記念日として休校と定められているので、その休日のきわめて閑静な中で会員諸氏をお迎えしたかったからである。入梅期に近いため天候が心配されたが、2日目に少し雨が降った程度でそれも正午には止み、1日目の懇親会が盛会であったことと合わせて、開催校側としても大いに幸いとするところであった。

第22回大会シンポジウム

「ウェーバー社会学の方法と問題」について

池田義祐

例年のように、シンポジウムのテーマをはじめ、報告者、討論者が決定したのは、21回大会後の、夏から秋にかけてであったように思う。大会開催校の関西大学社会学部の生みの親ともいうべき臼井二尚先生からの熱心な助言によって、ウェーバーをとりあげた。方法論、一般理論として佐藤嘉一氏の「マックス・ウェーバーの行為理論と社会学的機能主義」、支配社会学の領域で碓井崧氏の「マックス・ウェーバーの支配団体論」、宗教社会学の分野から池田昭氏の「宗教の合理性」、そして社会学以外から中国哲学者の木全徳雄氏による「ウェーバーの『儒教と道教』をめぐって」がそれぞれ報告された。ウェーバーの宗教社会学の一部「儒教と道教」の名訳者である木全氏の報告が、その巧妙な話術とともに、社会学徒である我々に特に深い印象を与えたことを憶えている。

第23回大会

時　昭和47年5月19日(金)・20日(土)
於　金城学院大学

《第1日》

◇ シンポジウム「家族問題と家族社会学」

司会　上子　武次・川越　淳二

(1) 研究動向と当面の問題点　甲南大学　増田　光吉

(2) 都市の家族問題　大阪市立大学　本村　汎

(3) 農村の家族問題　奈良女子大学　後藤　和夫

討論者　都市の家族問題　金城学院大学　高橋　純平

農村の家族問題　関西学院大学　光吉　利之

☆故高田保馬博士追悼講演　司会　金城学院大学　古川　氏幸

「高田先生の人と学問」　関西社会学会顧問　臼井　二尚

《第2日》

第1室　—理論I—　司会　杉之原　寿一・田中　清助

(1) ウェーバー社会科学の分析論理　京都大学　鈴木　正仁

(2) ウェーバーにおける禁欲と神秘主義
—「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」の再検討—
和歌山大学　池田　昭

(3) ウェーバーにおける変動論とその問題点　京都大学　木田　融男

(4) マルクスにおけるゲマインシャフトと
ゲゼルシャフトの概念について　高野山大学　岩崎　信彦

第2室　—理論II—　司会　小関　藤一郎・森　好夫

(1) 深さの社会学の成立　—G．ギュルヴィッチにおける社会と個人—
京都大学　今津　孝次郎

(2) 未開社会における交換について　大阪大学　平松　闊

(3) 機能要件理論から交換理論への内的展開
—ホーマンズ社会行動論の「移行の論理」—　東北大学　小坂　勝昭

(4) 変動過程分析の基本枠組　—構造—機能分析法の展開—
京都大学　吉田　民人

☆重点部会「産業構造の変革にともなう労働者の態度と行動」

司会　萬成　博・橋本　真

(1) 豊かな労働者についての研究動向　関西学院大学　小関　藤一郎

(2) 繊維産業労働者の定着意識

A．縫製加工業の事例における定着意識　関西学院大学　牧　正英

仏教大学　大西　正曹

B．紡績業の事例における定着意識　関西大学　西山　美瑳子

C．定着意識の心理的規定要因　関西学院大学　佐々木　薫

(3) オートメーション化と労働者の疎外　同　萬成　博

同　石井　徹

同　清水　三千夫

(4) 余暇の実態と今後の問題　甲南大学　井森　陸平

☆研究発表　司会　鈴木　宗憲・四方　寿雄

(1) 八咫鏡と古代社会　—宗教社会学の方法論として—

近畿大学　後藤　文利

(2) アメリカにおける階級とカスト

—W. L. Warner 的理論化の諸問題—　大阪市立大学　青木　秀男

(3) 家族関係における統合度の測定について　愛知県立大学　森田　洋司

(4) 職業生活としての現代サラリーマン　京都大学　竹内　洋

(5) 犯罪における自律性と非自律性

—アナーキスト大杉栄と過激派青少年の比較—　同　柴野　昌山

第23回大会の思い出

高橋　純平

本大会を迎えた昭和47年には、金城学院大学の社会学科創設10周年にあたり、この年に本学会の会場をお世話できたことは、私どもの学科の歴史において、エポックを画するにふさわしい行事であった。ただ、本学の特殊事情のため、会期が金・土とやや異例の曜日となり、会場も2ケ所に分散し、会員諸氏にご迷惑をかけた点を、いまも申訳なく思っている。それにもかかわらず、大会参加者238名、懇親会出席者62名を数え、一応の責任を果しえたのは、委員長はじめ事務局側諸氏のご努力と会員諸氏のご協力によるもので、改めて深く感謝したい。

この大会の特別企画として、学会顧問臼井二尚氏により故高田保馬博士追悼講演がおこなわれたが、斯学の大先覚者の学風が見事に浮彫りにされ、多大の感銘を与えたことは記憶に新しい。なお、シンポジウムは、女子大である本学の特殊性も考慮されて、家族問題がとりあげられたが、そのためか、この年の卒業論文のテーマがとくに家族に関するものが多かったことも学会にまつわる思い出の一つである。

第23回大会シンポジウム

「家族問題と家族社会学」について

上子 武次・光吉 利之

このシンポジウムによって明らかにされたことは、わが国における従来の都市家族へのアプローチと農村家族へのアプローチを交配することが必要だということである。これまでの農村家族の研究では、政治、経済、階層など家族生活の外にあるものによる家族の規定に研究の焦点が絞られ、家族内部の相互作用の研究などが等閑に付されていた。一方、都市家族の研究では、家族の内部構造や人間関係が主に問題とされ、外社会による規定の研究が十分になされてこなかった。前者に微視的な相互作用アプローチ、小集団理論アプローチを、後者に巨視的な構造機能アプローチを導入して、双方の研究を交配すべきであることが確認された。

このことはシンポジウムの重要な収穫であったが、「家族問題と家族社会学」の関係を論ずるというシンポジウムの本来の課題を十分な論議の対象となしえなかったことを反省している。

なお、このシンポジウムについては、上子が社会学評論23巻3号に報告してあるので参照されたい。

第24回大会

時　昭和48年5月19日(土)・20日(日)
於　甲南大学

《第1日》

第1室　　司会　後藤 和夫・土屋 貞蔵

(1) 政治的社会化研究の課題　関西学院大学　真鍋　一史
(2) 地位一貫性と政治的行動の諸問題　金城学院大学　丸木　恵祐
(3) レヴィ＝ストロウスの方法と社会観　京都大学　森田　三郎
(4) 4変数モデルによる因果推定法の検討　竜谷大学　船橋　和夫
(5) 社会測定の限界　愛知県立大学　高津　等
(6) 多重分類の処理について　大阪大学　西田　春彦

第2室　司会　田中　清助・橋本　真
(1) 表象論　大阪大学　森川　真規雄
(2) デュルケーム教育論の基本的性格　京都大学　高沢　淳夫
(3) A・トゥレースの「行為」概念の検討　大阪市立大学　林　信明
(4) 権威主義的組織体系の三層モデル　金城学院大学　碓井　崧
(5) 社会有機体論と現代システム理論　名古屋大学　板倉　達文
(6) パワー・エリート論の問題　京都大学　中　久郎

◇ シンポジウム「産業社会学の課題」
司会　小関　藤一郎・伊藤　規矩治
(1) 発展と展望　関西大学　野崎　治男
(2) 参加の問題　名古屋工業大学　谷口　茂
(3) 労働と余暇　神戸大学　長谷川　善計
討論者　関西大学　岡田　至雄
関西学院大学　遠藤　惣一
大阪市立大学　大藪　寿一
立命館大学　辻　勝次

《第2日》

第1室　司会　土田　英雄・阪井　敏郎
(1) 失対労働者の〝自立化〟過程とその実態　仏教大学　浜岡　政好
(2) 都市における家族　―堺市九間町東地区の事例―
甲南学園　川崎　澄雄
(3) 淡路島農村における三世代家族　明治大学　長谷川　昭彦
(4) 非行要因としての欠損家族の意義　関西大学　徳岡　秀雄
(5) 離婚原因の地域的差異とその背景　愛知県立大学　四方　寿雄
(6) 日系アメリカ人の実態　― 一世・二世と三世 ―
関西大学　前田　卓

第 2 室　　司会　杉之原　寿一・青井　厚

(1) 現代日本における指導層の社会的性格　関西大学　中道　実

(2) ソヴェト社会におけるインテリゲンチャ　大阪教育大学　沢田　軍治郎

(3) 宗教集団の社会学的特質について　大阪大学　R. Baptist

(4) 米国社会における言語社会学の動向
—「社会階層と言語行動」の問題を中心として—
金城学院大学　本名　信行

(5) 機械時代　—社会学的時代診断—　京都府立大学　園　直樹

☆ 重点部会「京都市山科地域における
社会構造の変容過程についての実証的な調査研究」
司会　江藤　則義・川崎　恵璋

1. 序　説　追手門学院大学　江藤　則義

2. 地域・人口構造　京都府立大学　益田　庄三
岐阜短期大学　佐々木　士郎
大阪教育大学　沢田　軍治郎

3. 政治・行政構造　竜谷大学　川崎　恵璋
関西大学　神谷　国弘
京都大学　木下　富雄

4. 経済構造　—特に企業団地について—　滋賀大学　出口　秋利
竜谷大学　笠原　成郎
同　志水　宏行

5. 宗教構造　—都市化と宗教構造—　京都大学　池田　義祐
京都工芸繊維大学　豊嶋　覚城
大谷大学　高橋　憲昭

第24回大会の思い出

井森陸平

一度は甲南大学でも大会開催の御世話をさせて頂きたいと思いながら、果たされなかったところ、丁度定年退職間もなく、多年の念願が叶い、皆様方の御厚志御協力により、質量共充実した大会となり、昼の研究発表、夜の懇親会と生涯数少ない楽しくも、有意義な時を過ごすことができた。おのずと、学会事

務局の運営や今度の大会のために致された増田光吉氏はじめ社会学研究室の方々の御骨折のことが思い出され、感謝の念を禁じ得ない。大会行事では、お手伝いした産業社会学の課題に関するシンポジウムのことが心に残る。型通り小関委員を中心に、度々関係の者が集まり、相互の意見の調整に努めたが、何分各自の研究領域や考察の観点、水準の相違のため、総論と各論との間に内面的な連関、一貫性をもたせたり、論点を限定して集約的な討究を行なうことが容易ではなく、シンポジウムの実をあげるには程遠いことが、今度も痛感された。今後、この方面における一段の進歩を期待したい。

第24回大会シンポジウム

「産業社会学の課題」について　　小関藤一郎

シンポジウムにおいて、産業社会学がとりあげられたのは、第15回大会以来のことで、約10年目である。この間、わが国の経済成長も著しく、この新しい情勢に当面して、上記のテーマが取上げられたのである。シンポジウムの焦点は「参加と余暇」におかれた。第1に野崎治男氏は、企業および社会において強大化していく権力の構造、これと結びつく統制と疎外の問題を分析した。第2に谷口茂氏から、現代産業社会における参加の運動の現状とその意義について論述がなされ、第3に長谷川善計氏から余暇の問題について、各種の資料を参照して内容の豊かな発表が行われた。発表に続いて討論者岡田至雄、大藪寿一、遠藤惣一、辻勝次の四氏から活発な討論が行われ、ついでフロアからの討論も加わり盛会裡に終った。なお司会は小関藤一郎、伊藤規矩治が担当した。

第25回大会

時　昭和49年5月24日(金)・25日(土)
於　香川大学

《第1日》

第1室　　司会　森　好夫・青井　厚

(1) 「構造」概念の再検討　—レヴィ＝ストロースにおける構造了解—
京都大学　上野　千鶴子

(2) 現代社会学と機能主義　—ゴールドナーをめぐる問題—
高野山大学　谷口　浩司

(3) システム理論と非合理的な要素
—パーソナリティ・システムとグループ・システムの
接合という観点よりみた一次元の問題—
京都大学　木村　洋二

(4) 境界相互交換についての一試論　奈良女子大学　新　睦人

第 2 室　司会　間場　寿一・橋本　真

(1) 政党支持態度の実証的研究　—政党支持の概念の再検討—
関西学院大学　真鍋　一史

(2) 「大学教授」における「政治的志向」について
—A大学の調査事例を中心として—　同　中野　秀一郎

(3)・(4) 衆議院議員の社会的構成
1. 議員職の長さと安定性　京都大学　高沢　淳夫
同　中　久郎
2. 経歴分析　関西大学　中道　実
京都大学　八木　秀夫

第 3 室　司会　川崎　恵璋・土屋　貞蔵

(1) 一村落の集団論的研究　関西学院大学　井上　文夫

(2) 一村落社会の変容過程に関して
—兵庫県宝塚市長谷地区の事例より—　関西学院大学　交野　正芳

(3) 明治商法にみられる職業観の変遷　関西学院大学　松井　茂樹

(4) 鉄鋼業と紡績業における現場監督者
—「意見調査」結果からの比較—　関西大学　西山　美瑳子

◇ シンポジウム「水と村」　司会　松本　通晴・池田　義祐

(1) 讃岐の水　香川大学　高桑　紀
(2) 水の民俗　同　角　節郎
(3) 水と村　関西学院大学　余田　博通
(4) 地域開発と農業用水　金沢大学　二宮　哲雄
討論者　竜谷大学　口羽　益生
愛知大学　牧野　由朗
名古屋大学　中田　実

《第 2 日》

第 1 室　司会　高島　昌二・杉之原　寿一

(1) 内生因変動のメカニズムについて　―百姓一揆の分析から―

京都大学　橋本　満

(2) 社会構造と言語行動

―イギリスにおける母と子のコミュニケーションを中心として―

金城学院大学　本名　信行

(3) グッドマンモデルの適用例　九州工業大学　平松　閎

天理大学　山本　剛郎

(4) 都市の計量的分析について　大阪大学　西田　春彦

第 2 室　司会　小関　藤一郎・鈴木　宗憲

(1) 宗教的回心に関する一研究　―「大本」信徒の信仰の実態―

一橋大学　日野　謙一

(2) 「集合表象」の認識論的基礎　四天王寺女子短期大学　清水　夏樹

(3) ナチズムの批判的検討　―闘争イデオロギーとしてのナチズム批判―

京都府立大学　鈴木　正仁

(4) 文化と役割期待について　愛泉高等学校　飯田　義清

(5) 自我の社会学　京都府立大学　園　直樹

第 3 室　司会　四方　寿雄・阪井　敏郎

(1)・(2) 民営アパートにおける家族生活　―京都市南部の場合―

1. 居住空間と家族　竜谷大学　舟橋　和夫

2. 家族生活における対人関係　滋賀県立短期大学　武邑　尚彦

(3)・(4) 東海地方における「むら」の変貌と家族生活

1. 概　要　愛知県立大学　四方　寿雄

2. むらの共働き家族　愛知教育大学　高島　昌二

3. むらの出稼ぎ家族　愛知県立大学　森田　洋司

4. 老人と家族　愛知県立大学　高津　等

(5) 社会福祉と社会学　四国学院大学　岡田　藤太郎

☆ 重点部会「漁村社会学の問題」

司会　後藤　和夫・土田　英雄

(1) 離島漁村の構造　―長崎県、五島列島・六島と黄島の場合―

長崎大学　中野　正大

(2) 自然と漁民と俗信　京都府立大学　益田　庄三

(3) 漁業都市圏の社会学的研究　仏教大学　山岡　栄市

(4) 漁業社会学の提唱と問題点　愛知大学　川越　淳二

第25回大会の思い出

角　　節郎

海によってへだてられたひな辺・麦秋の讃岐路で、恰も学会4半世紀の節に当たる大会が開かれた。開催校関係者にとって、有難いの感と心許ないの念とが交錯するものがあった。危惧した通り、世話役の不束さが、会員諸先生方に難渋のあれこれをおかけする破目になった。しかし、由緒正しい学会にはまた格別のものがあった。大会は、シンポジウム・重点部会・各分科会という、学的厳格さの理念をたて糸に、学的寛容さの精神をよこ糸にしつつ進捗した。来し方からの結実があり、先行きへの胚胎もあり、いかにも斯学の府らしい風格が、そこにはあった。レセプションもお膳立ては粗末であったが、研究をめぐる交歓あり、雅趣ある談古あり、かつはまた談笑あり、いつしか刻は過ぎた。人間と文化は海によってつながれた想いであった。本学にとっての大会の余沢に謝しつつ、学会のいやさかを念ずる。知らずいつの日のことか、またの折を期するのみである。

第25回大会シンポジウム

「水と村」について

角　　節郎

シンポジウムの主題や方法について、開催校は関与する立場にはない。しかし、学会委員会の特段の配意により、たまたまその機があった。開催校として格別の腹案とてなかったので、ただ、讃岐のお国ぶりについて述べてみたままである。その折に、讃岐の稲作のことどもやむらむらのたたずまい・ため池の風景とかについて、自らの関心にこと寄せてあげつらった。それがころもよく、委員会の検討の流れに沿ったのでもあろうか、「水と村」に落着いた。企画の具体化に開催校も加わった。しかし、水の民俗文化・ため池の映写、このことを別とすれば、あとは運営の実務について関ったのみである。ことは、いわゆる世話人の手で漸次詰められていった。このシンポジウムについては、その司会者・報告者・討論者などによって、近々にレポートが出されることになっている。諸般の経緯・内容等については、それを参照願いたい。

6. 欧米学者の講演会

ミヤガワ講演会

伊　藤　規矩治

T. Scott Miyagawa 教授は初期のフルブライト交換教授として来日され、同志社におられたのは昭和28年であった。いまから思えば、日本の社会学界はまだ国際社会から隔絶された状況にあり、同教授が「現代アメリカ社会学の動向」について話されたことも新鮮なひびきを持っていた。

マキーバーの愛弟子であったことから、コロンビア系の社会学に力点がかけられていたとも思うが、パーソンズの紹介をされたことと、特に筆者個人にとってはホーソン実験について詳しい説明をされたことがいまでも印象に残っている。昭和30年代までに同志社大学で講演をして下さった外国人社会学者がほとんどすべて地上から姿を消してしまわれたなかに宮川教授がいまでもボストン大学におられることは喜びである。

ハイマン講演会

伊　藤　規矩治

E. HeiMann 教授が同志社大学で講演をされたのは、昭和33年の6月であった。日本の社会政策学者に影響を及ぼしていたためか、学生のための一般講演のときは、1,000人以上もはいる大教室が文字どおり満員になったものである。社会学会のための講演会は3、40人の出席だったと思うが、さすがに透徹したマルクス社会学の説明と、マックス・ウェーバーについてのつきはなした評価とが耳にのこっている。1889年（明治22年）生れのこの碩学は1967年5月31日ハンブルクで波瀾にみちた生涯を了えている。

ヘルファールト講演会

伊　藤　規矩治

国家学、比較法学、殊に東洋の法体系の研究者として著名であった

H. Herrfahrdt 教授が来日されたのは、1958年にマールブルク大学の名誉教授となられたのを機会に、生涯の研究対象であったアジア地域を実際に自分の目でたしかめようとしたからである。

講演は1960年（昭35）1月15日、京都大学の楽友会館でおこなわれ、演題は「欧洲およびアジアにおける家族と国家の発達（Entwicklung)」であった。欧洲では自由と民主主義が爛熟し、責任の主体としての個人主義が峠をこして、安全を求めるに急となっているが、東洋の共同体、権威主義、普遍主義から学ぶことがあろうか、というようなことが主旨であったと思われるが、個人も自由も民主主義も未成熟のままに甘たれはじめているこの国の現状を見れば、恥しさが先にたって、ドイツ人の浪漫癖を笑うわけにも行かない気がする。そのヘルファールト教授も1969年9月12日、40年近くも教授として生活したマールブルクで逝去された。享年79歳であった。

レヴィ講演会

橋本　真

昭和35年7月28日、たまたま京都アメリカ研究夏期セミナーの講師として在洛中であった Marion J. Levy, Jr.（プリンストン大学社会学教授）の講演会が、京都アメリカ文化センターにおいて開催された。出席者33名。題目は Some Aspects of the Structural-functional Analysis. 講演要旨を述べると、まず概念図式と理論体系と分析の体系との区別をし、概念図式は理論ないし理論体系を構成するために作られるものであり、理論体系は社会学にはまだなくて、パーソンズの研究も分析の体系の構成であって、分析の体系はまた比較分析のための準拠枠ともなることを強調された。次に構造機能分析の諸側面として、(1) 構造と機能、(2) 構造的要件、(3) 構造的前提要件（社会変動を扱うとき必要)、(4) 順構造と逆構造、(5) 潜在構造と顕在構造、Levy のいう UIR (unintended but recognized) 構造と IUR (intended but unrecognized) 構造、(6) 分析的構造と具体的構造、などについて、一方でパーソンズ、マートンの考えを取り上げ、他方でとくに日本の社会構造を具体例として引き合いに出しながら、レヴィ教授自身の見解が開陳された。そのあとの高田保馬先生や

森好夫氏などとの討論は内容のある有意義なものであった。お礼に同教授に写真帳「京都」を贈呈したが、大変喜んでおられたのが強く印象に残っている。

マートン講演会

磯部卓三

初来日の Robert K. Merton 教授は、昭和42年8月1日同志社大学で、「科学の社会学」と題して講演を行った。教授は、まず日本語で簡単に挨拶、会場の雰囲気が和ぐとともに本題に入った。まず教授自身がその代表的開拓者である「科学の社会学」のアメリカにおける発展状況にふれた。次いでこれを6つの下位分野に分け、それぞれについて、具体的な研究例をあげながら説明するとともに、この新しい研究分野が社会学の共有財産である諸知見の応用によって開拓可能な所以を示した。また教授は、この分野の研究の意義、将来の可能性を示唆し、最後に日本でもこの方面での研究が発展するようにとの希望を述べて、約2時間にわたる講演を閉じた。（なお、講演内容は、日米フォラム、1968年4月号に邦訳、所収されている。）

ソーヴィ講演会

小関藤一郎

フランスの有名な人口学者で、雑誌「ポピニラシオン」(人口）の編集責任者であった Alfred Sauvy が、昭和45年11月フランス政府派遣の文化使節として来日、東京で人口問題研究所、東大などで講演をした後、11月12日、13日、関西を訪問された。この機会に、11月12日の午後、大阪の科学技術センターで、関西日仏学館大阪文化センターとの共同主催の下に「世界の人口」と題する講演を行った。同氏の名は日本では比較的知られていなかったためか、参会者は比較的少数であったが、現在の世界人口の問題点、先進国と開発途上国の当面する問題について、該博な知識を傾けて約1時間半にわたって、熱弁がふるわれた。70歳という高齢を感じさせない迫力ある話をうかがうことができて、大きな感銘をうけた。なお、通訳は小関藤一郎があたった。

フリードマン講演会

小関藤一郎

フランスの産業社会学の先駆者であり、かつまた現在その長老であるGeorges Friedmannは、昭和46年11月フランスの文化使節として来日されたが、この機会に11月15日（月）午後、関西日仏学館大阪文化センターと共同主催で、「労働と余暇」と題する講演会を開催した。会場は大阪駅前第一ビル内のモーツアルト・サロンで、学会員も相当多数参加した。フリードマンは、労働時間の短縮は直ぐ余暇の増大とはならず、その短縮された時間を主体的にうけとめてうまく使わなければ、余暇とはならないことも、いろいろの事例をあげて、ユーモアたっぷりに説明した。ことに、日本でテレビが家庭の中に非常に多く侵入している点を指摘し、テレビ中毒的気味があるという指摘は、急所をついた分析であった。通訳もふくめて1時間半ほどの話のあと、30分程、熱心な質疑応答があった。通訳には小関藤一郎があたった。

以上のほか、なお、ギンスバーグ、クラックホーン、その他の学者についても講演会が開かれたが、残念ながら本誌にはそれらの記事をのせることができなかった。

7. 編集あとがき

25年の重みをかみしめつつ、「関西社会学会のあゆみ—創立25周年を記念して」が、ようやく完成いたしました。数回にわたる編集会議には、各人の「思い出」も披露され、とても楽しいものでした。会員諸氏には、おいそがしい最中、きびしい注文にもかかわらず、こころよくご執筆下され、本当に有難く存じます。お願いした方全員が原稿をお寄せ下さったことは、準拠集団として関西社会学会の重要性を再確認させるものでした。出来あがったものがそのご期待にどれだけ応えうるか心配ですが、内容的には十分価値あるものと考えます。種々のあやまりもあるかと思いますが、今後、50年、100年の記念誌の中

らためてゆければと思っております。

なお、編集の都合上、お寄せ下さった原稿に勝手な修正を加えさせていただきました。よろしくご了承下さいますようお願いします。

皆さまのご協力に深く感謝して。

（関西社会学会事務局・船津）

関西社会学会25周年記念事業実行委員

上子　武次、　川越　淳二

豊嶋　覚城、　森　　東吾

森　　好夫、　船津　　衛

「関西社会学会のあゆみ
—創立25周年を記念して」

昭和50年4月

発　行：関西社会学会

〒558　大阪市住吉区杉本町
大阪市立大学文学部

印　刷：松栄印刷株式会社

大阪市浪速区浪速西3—2